

生誕140年

塩月桃甫とその周辺作家たち

2026年6月6日(土)～7月5日(日)

デジタルアーカイブ

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART

ごあいさつ

高鍋町美術館が掲げた使命の1行目には、次のような一文があります。

西都市・児湯郡で唯一の公立美術館として、
優れた美術品を収集し、大切に守り、後世へと伝えていく

西都市・児湯郡の画家のなかでもひとときわ注目を浴び続けてきた画家の塩月桃甫について、生誕140年となる記念のこの年に、展覧会を実現できることを大変嬉しく思います。

塩月桃甫（本名・永野善吉）は1886（明治19）年、西都市三財に生まれた画家です。1912（明治45）年に東京美術学校図画師範科（現・東京藝術大学）を卒業し、9年間教職に就いたのち1921（大正10）年に台湾に渡り、台湾美術展の創設に尽力し、審査員を務めるなどして約25年間台湾美術界の発展に貢献しました。宮崎に戻ってきてからも、学校美術展や宮崎県美術展覧会の審査員、宮崎大学や宮崎実践女子商業学校（現・宮崎学園高等学校）、日向女子自由学園、児湯郡教育会教科研究会の教授や講師を務め、書籍、新聞、文芸誌、雑誌等の装丁もおこないました。1946（昭和21）年には児湯郡高鍋中学校の嘱託を務め、高鍋中学校友会美術部を結成するなど、高鍋町ゆかりの作家でもあります。

本展は、現在個人が所有している作品や関連の資料を中心に調査するとともに、塩月の交友関係とそこから受けた影響および与えた影響について整理するものです。西都・児湯ゆかりの画家のなかでも、戦後宮崎の美術界に多大な影響を及ぼした塩月が、日本およびアジアの近代美術に果たした役割と画家として追求したものについて改めて考える機会となれば幸いです。

おわりに、本展の開催にあたり、作品や資料の提供に快くご協力いただきました小松孝英様、日州ドキュメンタリー様、塩月光夫様、荒川茂様、黒木榕様、鈴木いつせい様、所薫子様、日高範子様、三尾和子様、さいと塩月桃甫顕彰会様、みぞえ画廊様、宮崎市安井息軒記念館様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

2026年6月6日

高鍋町美術館

謝辞

謝辞

本展の開催にあたり、貴重な作品を貸与してくださいました小松孝英様、塩月光夫様、宮崎市安井息軒記念館様をはじめ、作家の調査、作品の出品など様々な面でご協力、ご助言を賜りました皆様に厚く感謝の意を表します。また、監修を務めてくださいました小松孝英様のご尽力に対し、改めて御礼申し上げます。

荒川 茂
黒木 榕
小松 孝英
塩月 光夫
鈴木 いっせい
所 薫子
日高 範子
三尾 和子

さいと塩月桃甫顕彰会
日州ドキュメンタリー
みぞえ画廊
宮崎市安井息軒記念館

(個人・団体別、五十音順、敬称略)

凡例

凡例

- ・本書は「生誕 140 年 塩月桃甫とその周辺作家たち」（令和 8 年 6 月 6 日～7 月 5 日 高鍋町美術館）の開催に際し出品された作品について収録した。
- ・図版ページの作品情報については作品番号(順路) 順に、「図版」「作品名」の順に表記した。
- ・題名が不明の作品については、「タイトル不明」とした。
- ・図版ページにて図版を並列している場合は、上から下、左から右の順に掲載した。

目次

ごあいさつ	p.1
謝辞	p.2
凡例	p.3
目次	p.4
図版	p.5
塩月桃甫展を開催できた意義について	p.38
出展作家略歴	p.41
関連作家生没年表	p.56
展示風景	p.57
作品リスト	p.69
展覧会情報	p.73
関連事業	p.76

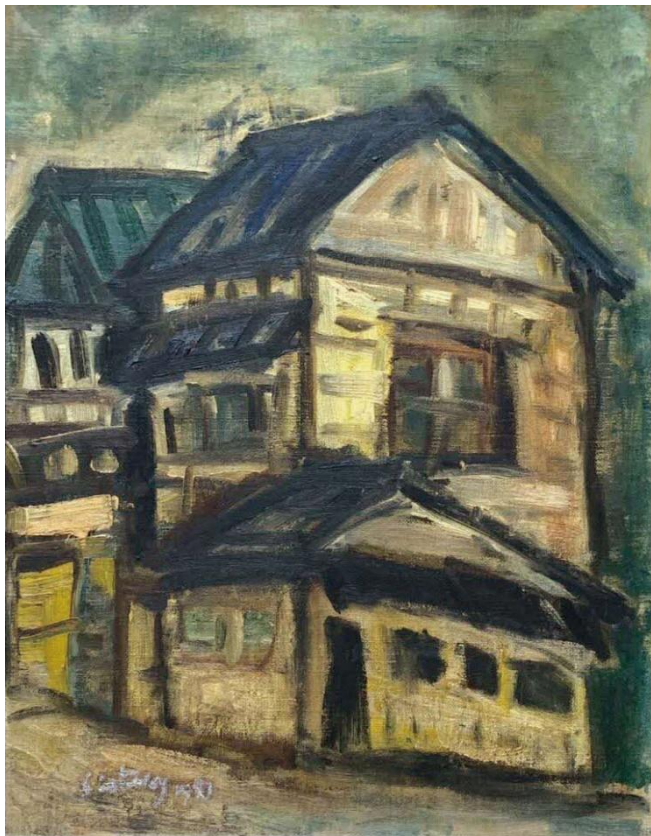
第1章

画家、教育者としての塩月桃甫

1886（明治19）年に西都市に生まれた塩月は、東京美術学校を卒業した後に大阪や松山（愛媛県）で教師として勤めます。松山で高浜虚子らの文人と交流し、南画風の作品を残していることは、あまり知られていません。そして36歳のときに台湾に渡り、台北一中と台北高校で教師として美術教育に携わりました。統治の視覚化が目的と言われた官服（行政官の制服）をあえて着なかったことや、個性を尊重する自由な美術教育であったこと、1930（昭和5）年の霧社事件（抗日闘争）を題材にした作品《母》を発表したこと、そして台湾原住民の民族衣装に魅了されたことなどからも、塩月が台湾に対してどのような姿勢を持っていたかをうかがい知ることができます。

その後、台湾で25年間を過ごし、台湾美術展覧会（台展）に第1回展から携わったほか、独立美術協会の台北巡回展を開催するなどして、台湾の美術振興に情熱を注ぎました。これらは当時台湾の画家たちを大いに刺激し、結果として台湾では美術団体が次々と設立されることとなりました。ところが、台展の創設時に塩月が日本人画家だけの模範展覧会を設けるよう提案したという事実や、総督府による政策を背景に第9回の台展で台湾人の審査員が取り消されたことが問題となり、これらは塩月による「台湾人審査委員はずし」として台湾での反発は強まり、台湾人画家に対する差別観として議論の対象となりました。その後、敗戦によって多くの作品を台湾に残し宮崎へ引き揚げました。

これら一連の事象については、塩月が当時「日台美術家の間には水準に相当の隔たりがある」ため、「台湾人画家の作品がことごとく落選するようなことになると、社会的不満が生じる」ことを考えてのことであった、ということが現在においての見解です。その後は、宮崎大学の講師や県展（現・みやざき総合美術展）の審査員を務めるなどして宮崎の美術界に大きく貢献し、1952（昭和27）年に宮崎県文化賞を受賞しています。



油津



パイワン



台灣原住民少女



鷄



七福神の図



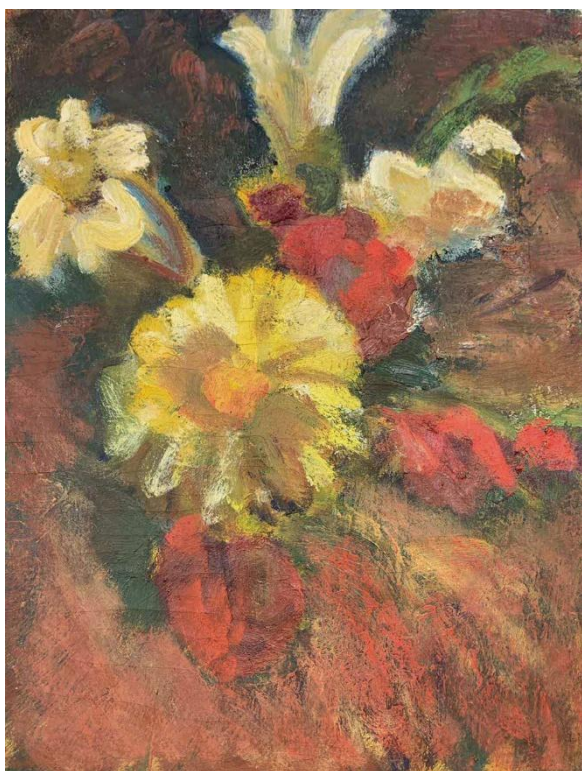
タイトル不明



猿



タイヤルの二人



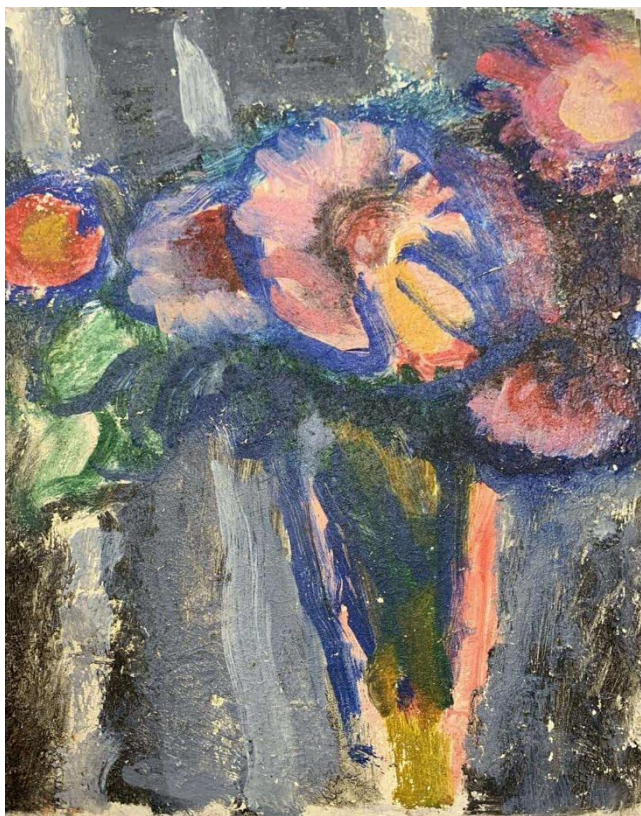
黄いろい花



花



赤い花



無題



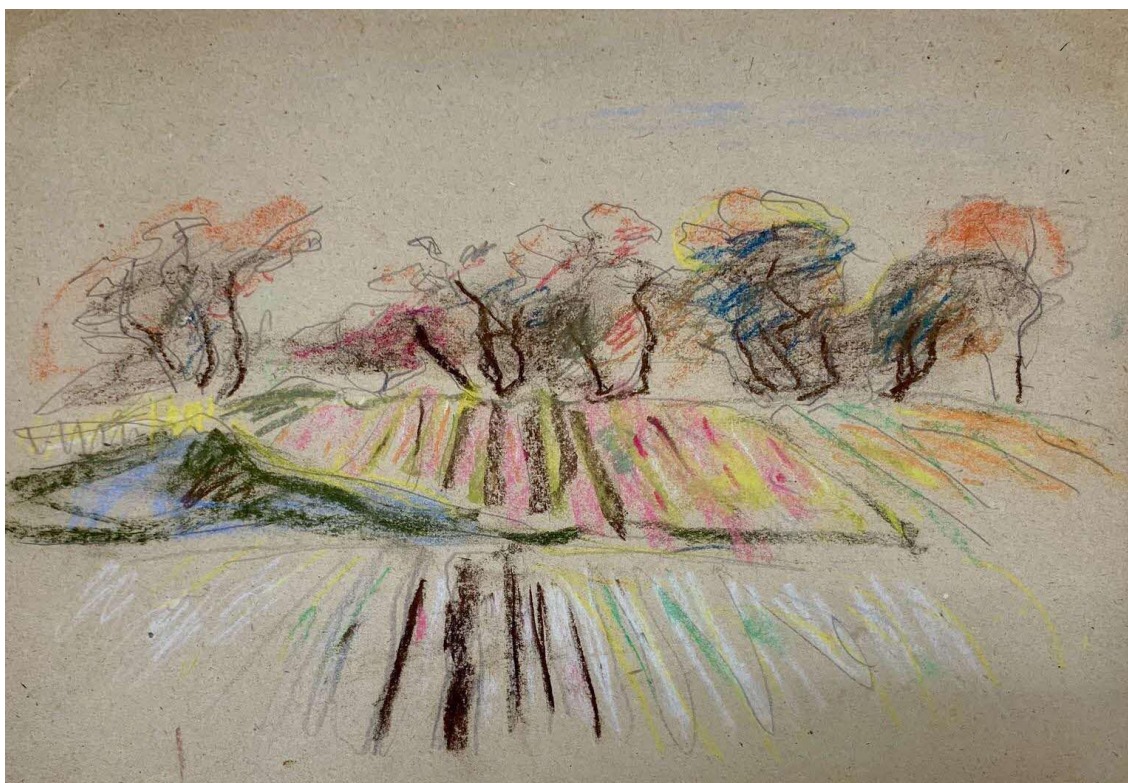
りんごのある静物



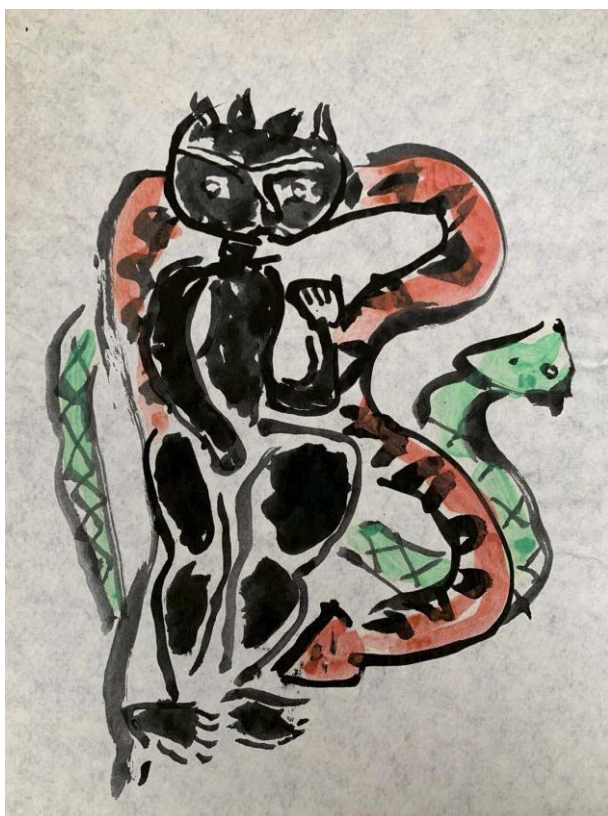
栗のある静物



風景（スケッチブックより）



風景（西都）



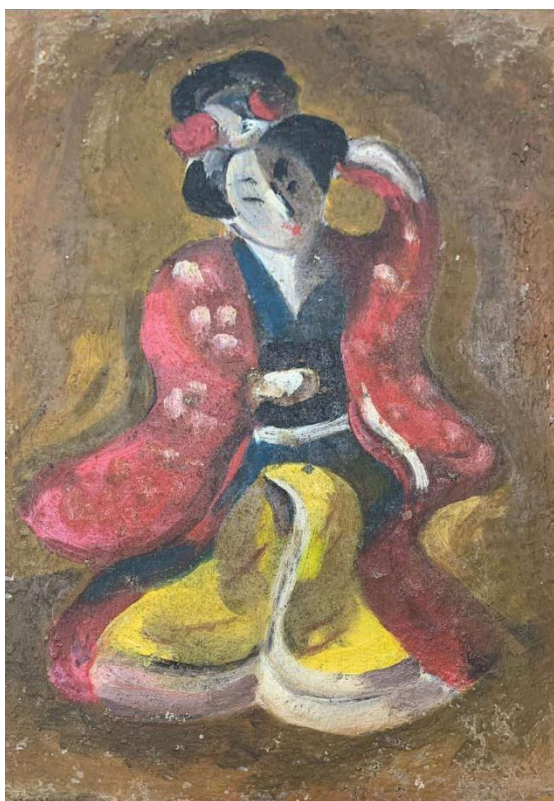
パイワン



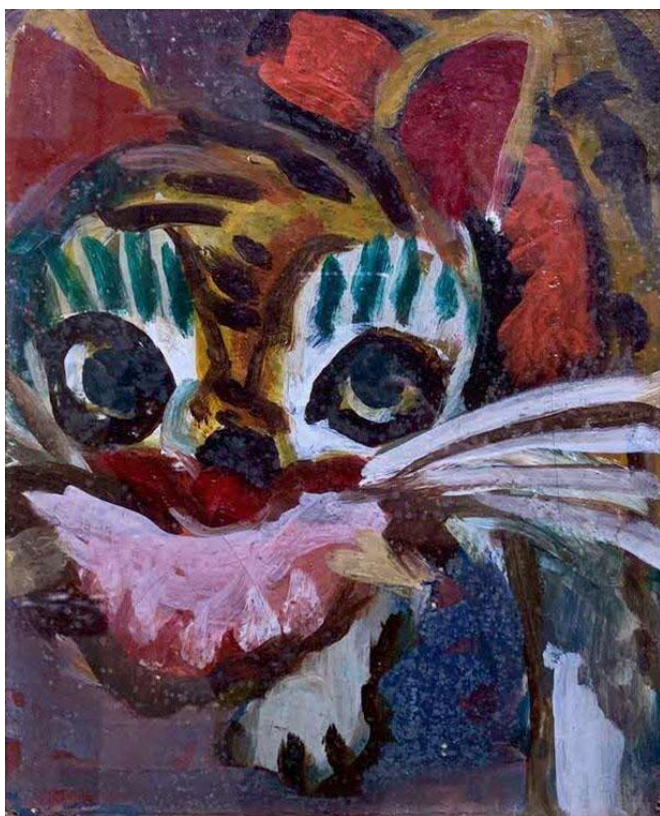
猫



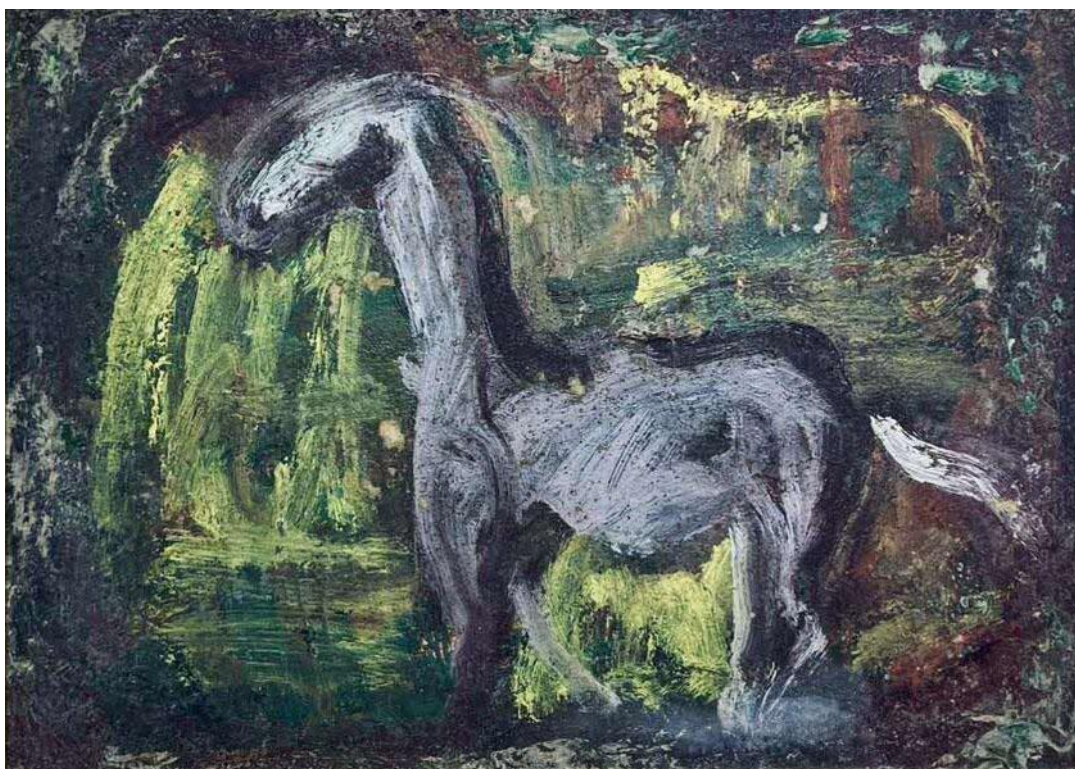
いちぢく



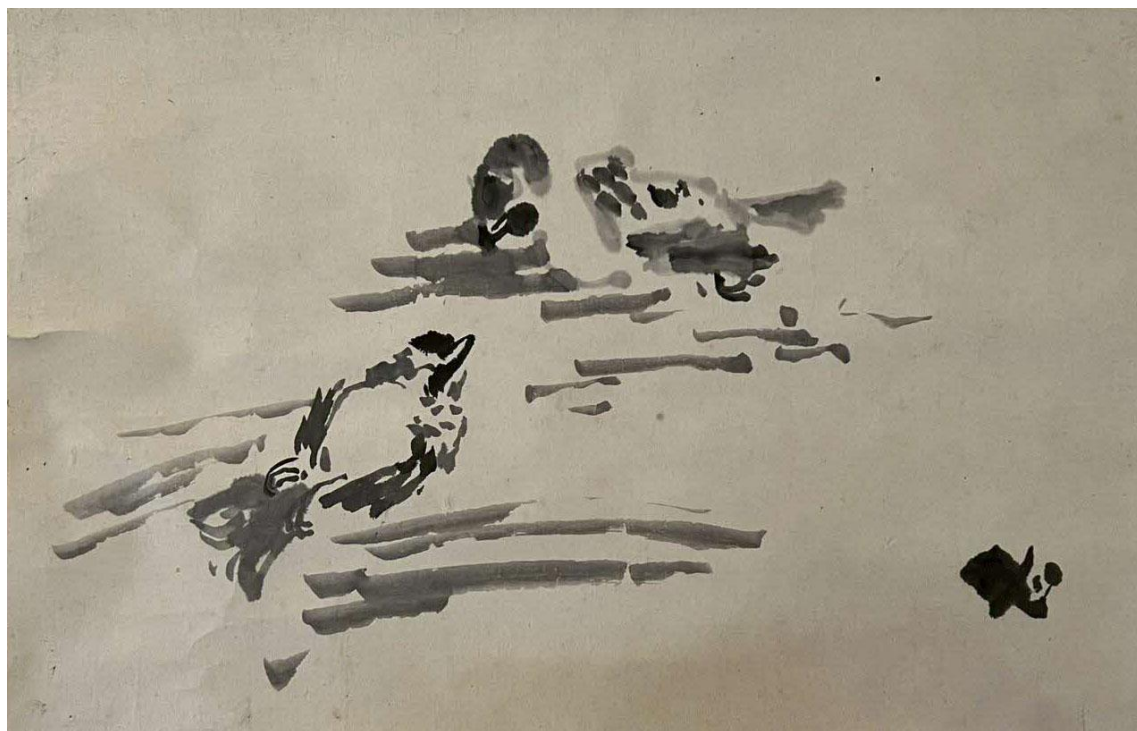
佐土原人形



張り子の虎



白い馬



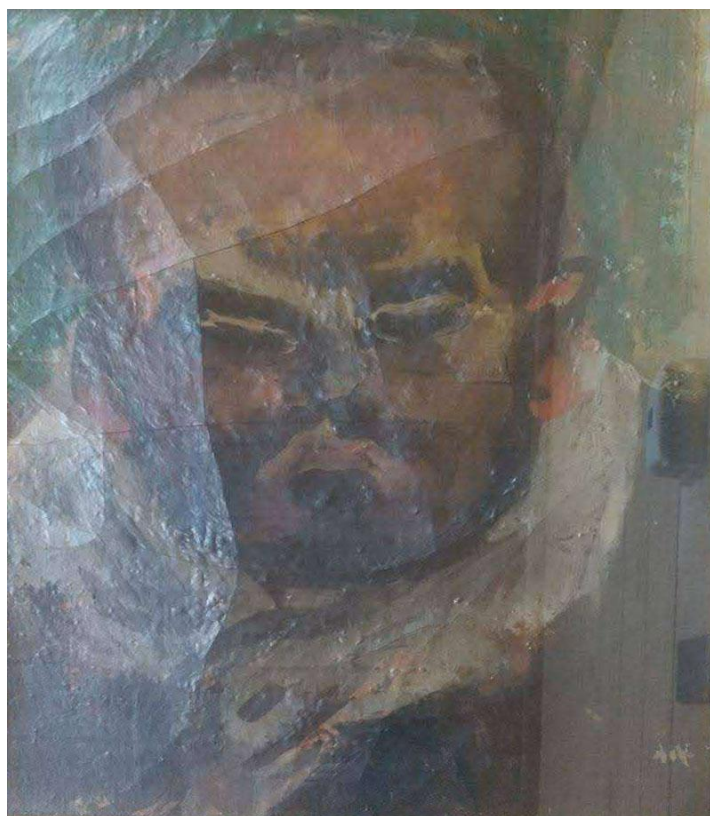
雀（下图）



雀



馬



安井息軒



(左上から)

装丁書籍『翠榕No.5』

装丁書籍『太陽の眼』

装丁書籍『帰一心命』

装丁書籍『河童の遠征』

装丁書籍『烏來情調』

資料『日向文庫完成記念写真』

装丁書籍『上杉鷹山』

装丁書籍『皇国の道』



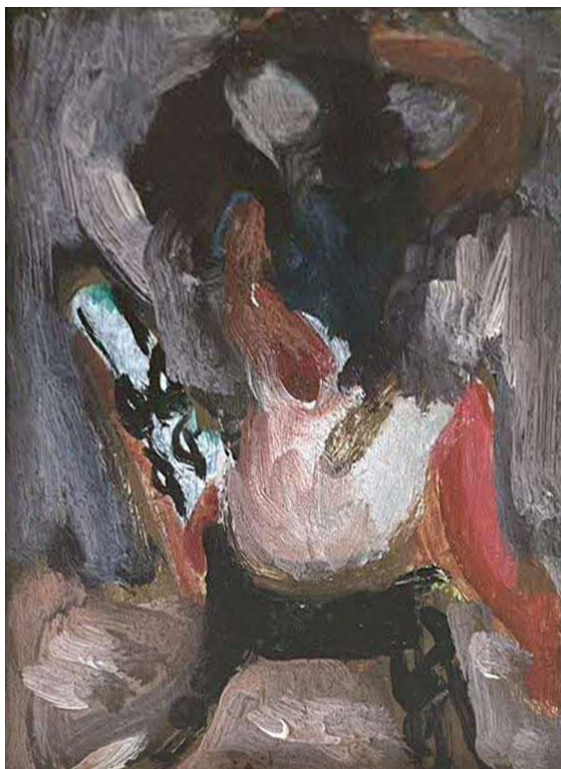
(左上から)

装丁書籍『生蕃伝説集』

装丁書籍『伊予の湯』

装丁書籍『改訂 児童文学論』

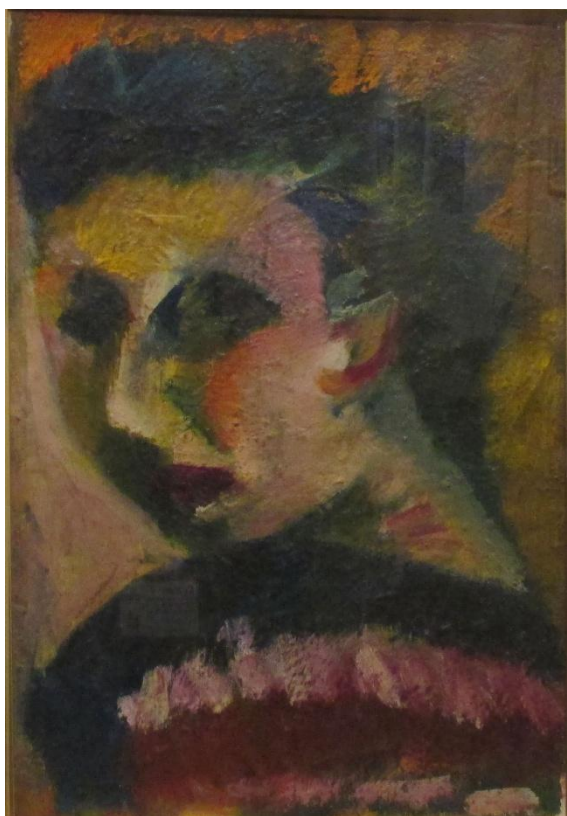
資料『聖戦美術展集』



よそおい



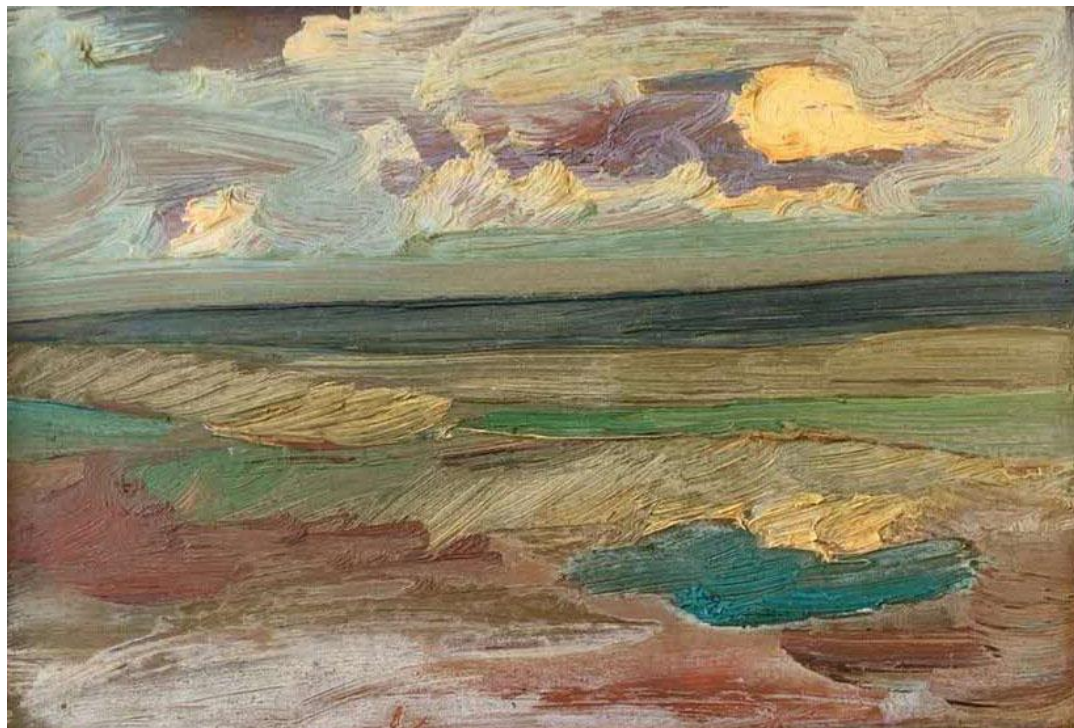
女(2)



女（1）



横たわる裸婦



海



霧島



青島



資料『皇太子殿下台湾行啓記念絵葉書』



資料『台湾総督府始政第四十回記念絵葉書』

第2章

塩月桃甫の周辺作家たち

塩月が、多くの画家たちとの関わりを持っていることは、あまり知られていません。たとえば、自身が台湾で美術教育に関わるより14年も前から、現地で美術教育に情熱を注いでいた石川欽一郎や、台湾美術展覧会へ審査員として招聘した小澤秋成（5、6回展）、藤島武二（7、8、9回展）、梅原龍三郎（9、10回展）、台湾第一中学校で指導に当たった西尾善積、医師として台湾で塩月を知り慕ったサイタ亨、戦時中に台湾美術展覧会をとおして塩月の存在を知った坂本正直、戦後宮崎県美術展の創設に共に関わり「桃甫会（後援会）」の顧問も務めた瑛九などです。

昭和初期、台湾には新聞で「画伯」と呼ばれる日本人画家が4人いました。石川欽一郎、塩月桃甫、京都で竹内栖鳳の門に学んだ日本画家の木下静涯、東京美術学校卒業生の郷原古統です。この4人によって、台湾美術展覧会創設の計画は総督府へと提言されました。特に石川と塩月は、「英国紳士風の水彩画家」（石川）と「野獣派風※1の油絵画家」（塩月）として、多くの台湾人の知るところとなり、台湾の画家たちは対照的な2人のスタイルに強く影響を受けました。

石川は図画教師の免許をとり、画家の道を志す台湾人学生の多い師範学校の美術教師でしたが、塩月は画家の道に進もうとする者が少ない旧制高等学校の美術教師であり、日本人生徒だけが通う台北一中の美術教師でもありました。このような職務上の違いは、戦後の台湾の画家たちのあいだにおける塩月の評価を複雑にしたと考えられています。

※1 野獣派（フォービズム）…20世紀初頭にフランスで起こった、原色を多用した強烈な色彩と、荒々しい筆致（タッチ）を特徴とする絵画運動。批評家のルイ・ヴォークセルが、「野獣（フォーヴ、fauve）の檻の中にいるようだ」と評したことに由来する。



(左から)
藤島武二 《波 (潮岬)》
梅原龍三郎 《椿》

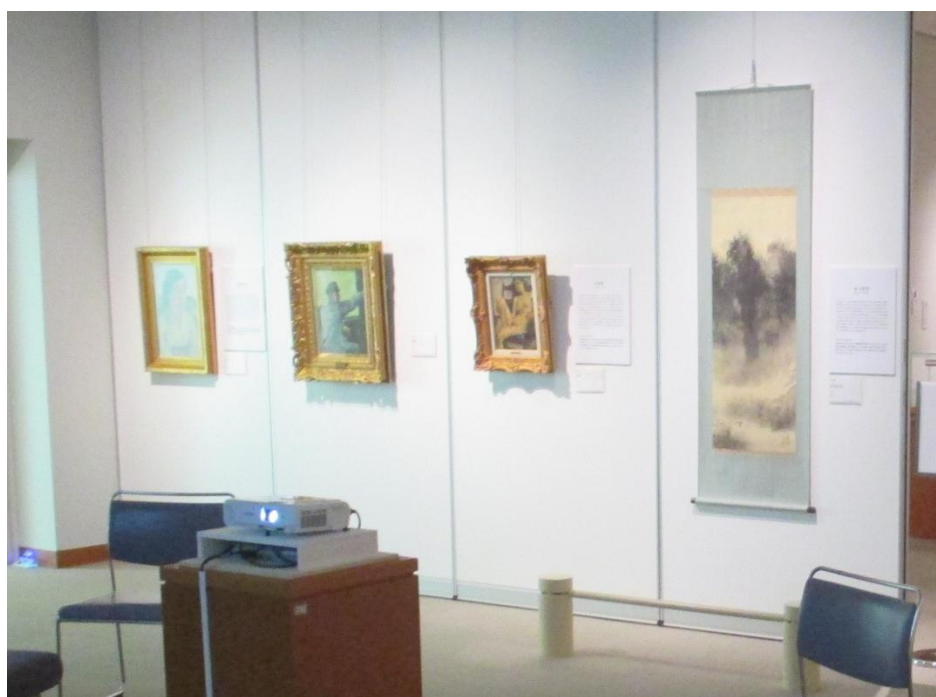


石川欽一郎 《武蔵野の新緑》





小澤秋成 ≪高雄風景≫



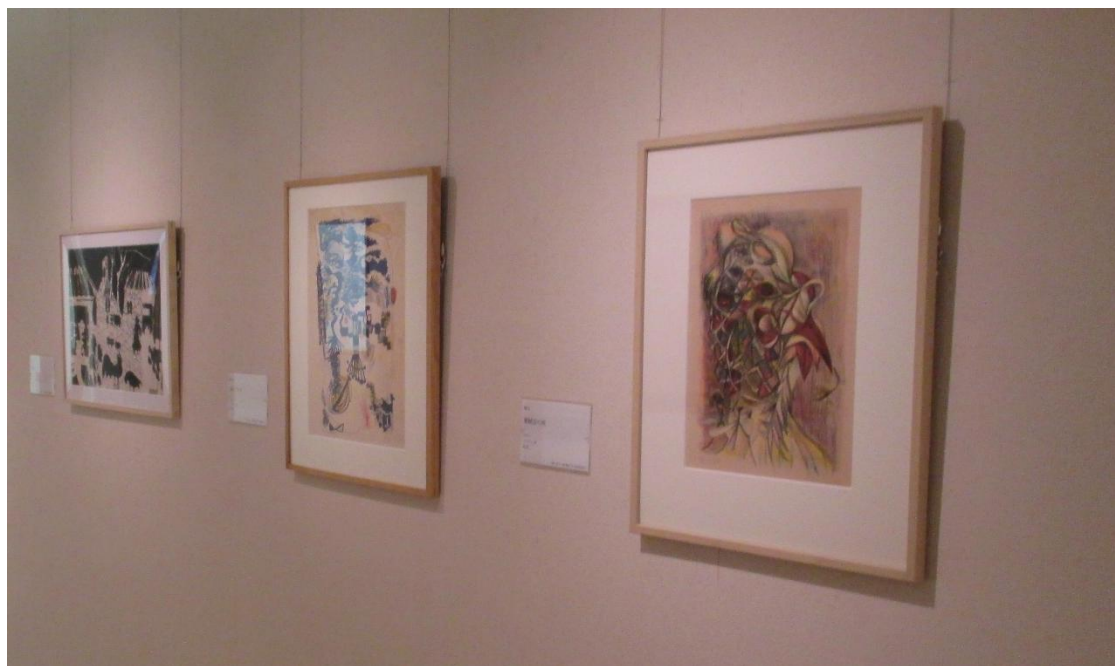
(右から)
木下静涯 ≪清雪宿禽之図≫
山田新一 ≪裸婦≫
山田新一 ≪機関士≫
中澤弘光 ≪婦人像≫



(右から)
 興梧富士夫 《海邊》
 坂本正直 《馬を輸送船にのせる》

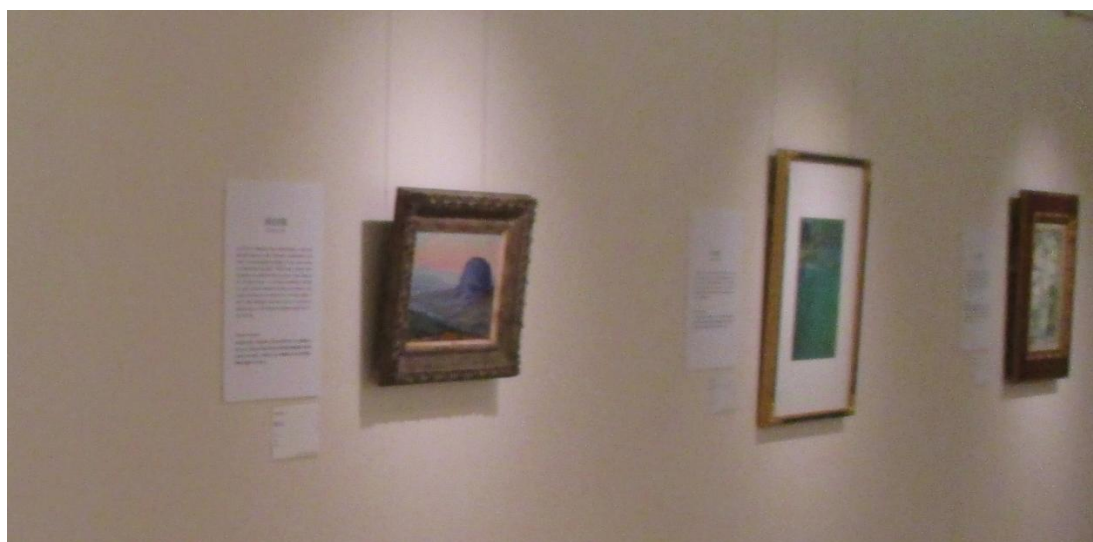


(左から)
 サイタ亨 《芥子》
 サイタ亨 《アネモネ》
 サイタ亨 《椿》
 瑛九 《タイトル不明》



(左から)

- | | |
|----|---------|
| 瑛九 | 《田園》 |
| 瑛九 | 《青いソナタ》 |
| 瑛九 | 《舞踏会の夜》 |



(左から)

- | | |
|------|----------|
| 西尾善積 | 《離れ山》 |
| 杉山昭 | 《緑の里》 |
| 石井秀隣 | 《カサブランカ》 |

第3章

塩月桃甫研究のいま

塩月は1921（大正10）年に台湾へ移住し、終戦までの約25年間にわたり精力的に制作しましたが、1946（昭和21）年に日本へ引き揚げの際に作品は台湾に残され、ほとんどの作品は散逸しました。戦後手掛けた作品についても1948（昭和23）年に小林市での火災で油絵20余点が焼失、1954（昭和29）年に宮崎県立図書館が火災に遭い、大作を含む12～13点が焼失しました。戦争や災害によって、作品の多くが現存していない状況にあります。これも、塩月研究が難航している要因といえます。

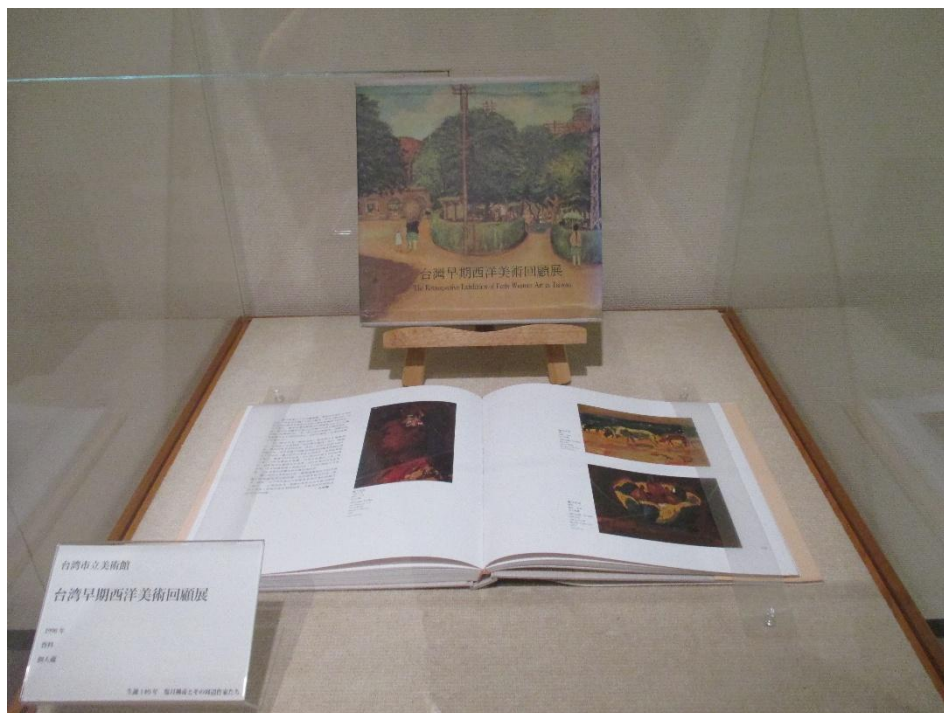
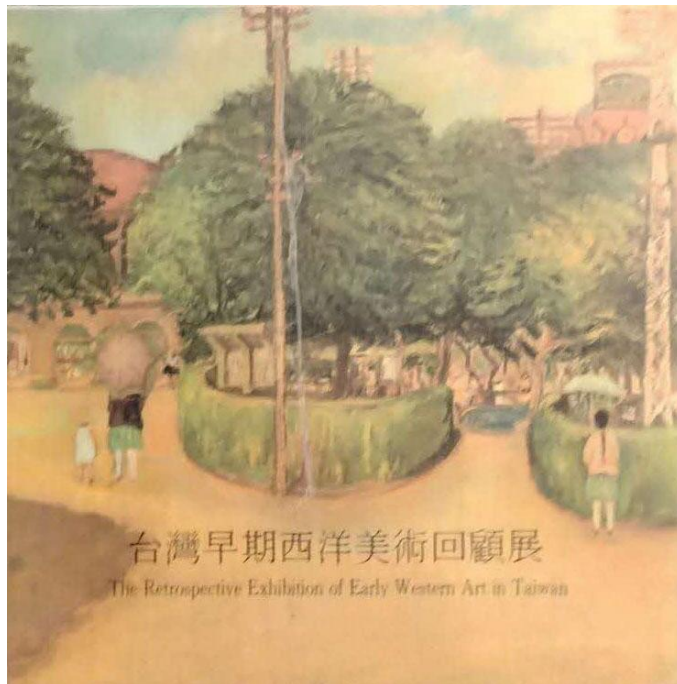
台湾を去って30年経った1975（昭和50）年、台湾の美術雑誌『藝術家』には謝里法※1による「台湾美術運動史4、『台展』西洋画部審査員－野獸派的鬼才塩月桃甫」が発表されました。謝は其中で、台展における塩月の「台湾人審査員はずし」を巡る言動を踏まえ、優れた画家ではあっても優れた美術教育者であることは困難であるといった旨の見解を示しました。これに対し、翌年には許武勇※2による「塩月桃甫興自由主義思想」という反論が主張され、塩月の言動は差別意識に基づくものではなく、台湾人画家の実力の向上を望む行為からであったと弁護されました。

1984（昭和59）年には台北一中の卒業生が塩月桃甫の画集が存在しないことを惜しんで、同窓会誌に特集を組み、原色版を含む画集に仕立てました。さらに許武勇は1986（昭和61）年に「塩月桃甫と石川欽一郎」として、この二人が早期の台湾画壇の基礎をつくったと主張しました。1987（昭和62）年の台湾戒厳令解除に伴い、植民地文化を再評価する機運が高まる中、台湾美術展覧会の創設者の一人として塩月も再評価されるようになりました。塩月が総督府に正式に雇われていたにもかかわらず、彼の作品が必ずしも総督府の政策を反映しているわけではないという評価も定着しました。1996（平成8）年から2001（平成13）年にかけて台湾植民地美術の調査と再評価が台湾にて開始され、2009（平成21）年には『南國・虹霓・鹽月桃甫』が発行されました。

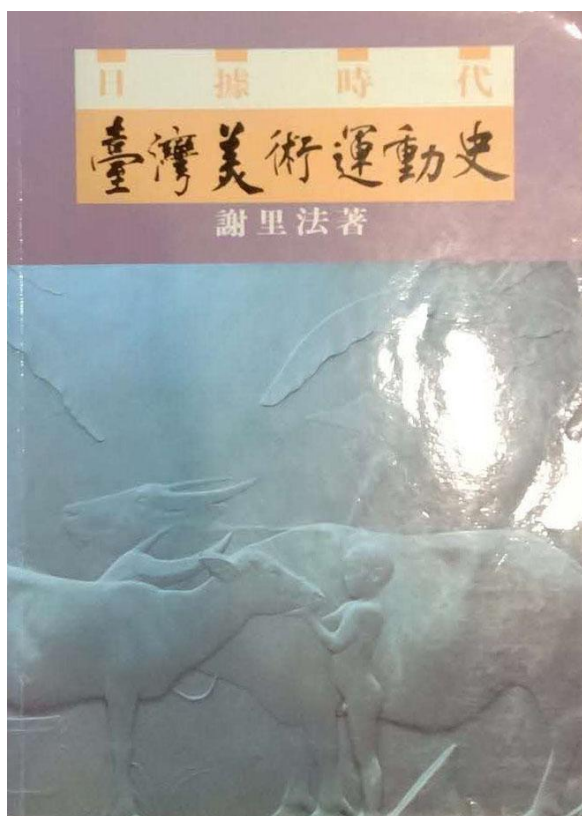
台湾での再評価を受け、2001（平成13）年に宮崎県立美術館では回顧展が開催されました。2021（令和3）年にはドキュメンタリー映画『塩月桃甫』が公開され、社会的関心が喚起されました。さらに、2020年に日本学術振興会の科学研究費助成事業として実施された研究「アジア美術におけるゴーギャン受容」や2024（令和6）年の「日本と台湾における都市からみる『故郷』の表象とその比較－1930年代を中心に」のように、アジア美術史の動向のひとつとして、塩月の研究は進められています。

※1 謝理法（1938－）…台湾の美術家、作家、美術史家。

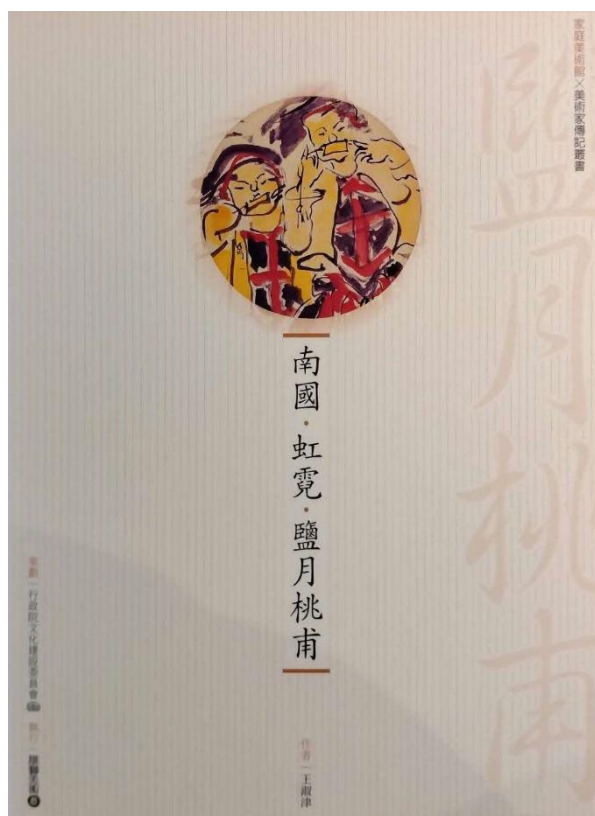
※2 許武勇（1920－2016）…塩月の台北高等学校時代での教え子。医師で画家。



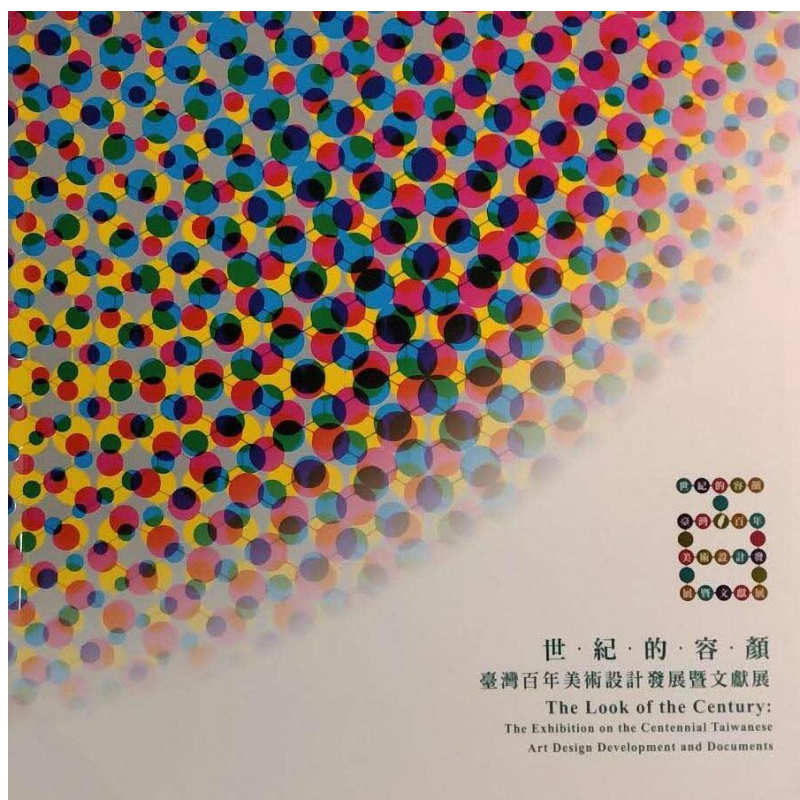
資料『台湾早期西洋美術回顧展』



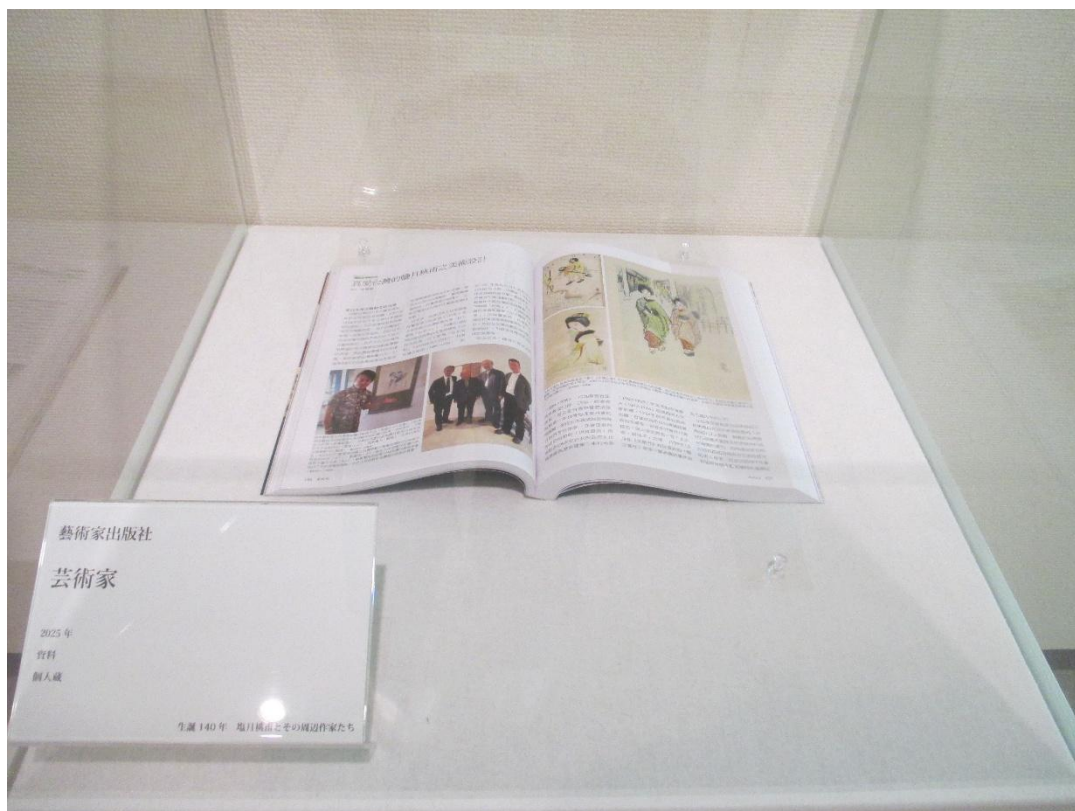
資料『台湾美術運動史』



資料『南國・虹霓・鹽月桃甫』



資料『世・紀・的・容・顏：臺灣百年美術設計發展暨文獻展』



資料『芸術家』

塩月桃甫展を開催できた意義について

高鍋町美術館 小森 隼

塩月の生誕 140 年となる記念の年に、宮崎県では 2001 年の宮崎県立美術館以来となる 25 年振りの塩月桃甫展を、ゆかりの地である高鍋の地で開催することができた。本展の開催は、監修者で「ドキュメンタリー映画 塩月桃甫」の監督でもある小松孝英氏（美術家）の尽力によるところが大きい。

塩月は、本町隣接の西都市三財に 1886 年に生まれ、終戦後に台湾から帰郷した 1946 年には高鍋中学校で美術教師を勤めるなど、ここ高鍋町にもゆかりのある画家である。台湾では、教科書にも掲載されているほど知られている塩月だが、2021 年に公開された前述の映画により認知度は高まっているものの、高鍋の地では美術愛好家に知られている程度で一般的に知名度が高いとは言えなかった。塩月に関する言及は、これまでに刊行された書籍や図録、ドキュメンタリー映画に多くの参考を得た。ここでは、小さな町立美術館で郷土ゆかりの作家を紹介できた意義について述べたい。

◆郷土の文化的文脈の再構築

公立美術館の重要な使命の一つは、地域ゆかりの美術資料を体系的に収集・保存・研究することである。全国的な知名度や美術史の主流から外れていたとしても、その地域に根差して活動した画家や、郷土の風土・人々の暮らしを描き続けた画家の作品には、地域の歴史的・文化的文脈が色濃く刻まれている。塩月のような画家の足跡を掘り起こす展覧会は、散逸の危機にある貴重な作品や一次資料を調査・保全する契機となり得る。本展でもこの地域に眠っている塩月作品がないかと情報提供を呼びかける掲示を行った。（数件の申し出があったが、既に発見されているものであった。）

学術的な再評価を通じて地域の美術史に新たな 1 ページを加え、郷土の文化的な厚みを可視化する取り組みとして、地域固有の知のアーカイブを次世代へ継承する基盤となった。

◆塩月の再評価と対外的なアピール

本展は、地域内での顕彰にとどまらず、その作家を再評価し、全国的な美術史的文脈へと

位置づけ直す契機となった。公立美術館が学術的な調査研究に基づき、作品の再発見や作家論の構築に取り組むことで、その成果をアーカイブとして対外的に発信する。これにより、中央の美術評論家、研究者、関係各所の関心を惹きつけ、巡回展への発展や、主要な美術史の叙述への組み込みといった形で、作家の評価が飛躍するケースも少なくない。さらに、地域発の優れた自主企画展としてメディアや専門家の注目を集めることは、その美術館自体のブランド力向上にも寄与する。「あの地域の美術館が取り上げた作家」として認知されることで、地域文化の発信力が強化され、中央と地方の文化的な対等性を高める一助となった。

◆台湾文化や戦後宮崎の紹介

台湾に渡った塩月が各地で交遊した人物、影響を受けた芸術運動、あるいは旅先で触れた異文化は、作家の作品や資料の中に濃密に記録されている。展覧会を通じて、作家の活動履歴を紐解くことは、間接的にその時代の社会的な出来事や、他地域の文化、海外の動向を地域の住民に紹介する機会となる。その足跡を追うことは、地方にいながらにして日本の近代化や台湾の歴史を追体験することにつながった。また、塩月が描いた対象や、収集した資料には、その地域や時代では触れる機会の少ない台湾の文化や風俗、戦後宮崎の状況が反映されていた。これらを丁寧に読み解き展示することは、地方に住む人々にとって、自らの視野を広げ、多様な文化や歴史への理解を深める教育的な意義を持つ。地域にいながらにして世界や歴史の広がりに触れることができる美術館は、住民にとっての知的な冒険の場として機能した。

◆シビックプライドの醸成と世代間交流

住民にとって、自らの地域から独自の世界を切り拓いた優れた表現者が存在したという事実は、郷土への愛着や誇り（シビックプライド）を育む直接的なきっかけとなる。中央の評価基準だけではなく、「私たちのまちの文化」として主体的に価値を見出す体験は、地域の文化的自立を促す。また、画家の親族、生前を知る住民、作品を所蔵してきた旧家など、地域社会との協働によって展覧会が形作られることも少なくない。展覧会と教育普及プログラム等を連動させることで、高齢世代から子どもたちへと地域の歴史や記憶が手渡され、世代間交流を生み出す結節点として機能した。

◆地域の公立美術館としての存在意義

知名度の高い巡回展や著名作家の大規模展は多くの集客を見込める一方で、どこの都市でも均質化しやすい側面を持っている。対して、地域固有の作家を発掘し独自の視点で提示する自主企画展は、その美術館ならではの独自性と専門性を強く打ち出す機会となる。地域課題や風土に真摯に向き合う学芸活動は、町美術館が行政機関・文化施設として地域に存在する正当性を高める。地域の歴史資源に新たな光を当てる姿勢を示すことで、住民にとって親しみやすく、生活に根差した「開かれた文化的拠点」としての信頼関係が構築された。

◆文化を起点とした地域活性化

地域固有の画家の調査・研究は、美術館内にとどまらず、地域全体へ波及する可能性を秘めている。画家の生家、制作拠点、描かれた風景などを巡る地域回遊型のフィールドワークや、周辺の文化資源・観光拠点と連携したまち歩き企画へと展開することで、文化を基軸とした持続可能な地域振興へとつながる。自らの足元にある豊かな文化資源を発見・発信することは、地域の内外に向けて独自の魅力を提示し、コミュニティの活力を高める確かな原動力となる。今回、西都市のさいと塩月桃甫顕彰会が本展の周知活動や上映会の協力など新たな連携を深めることができたことは、当館や高鍋町にとって大変意義深いものであった。

塩月 桃甫

しおつき とうほ

1886(明治19)年、西都市三財に生まれる。本名は善吉。旧佐土原藩士永野家の三男。宮崎県師範学校に学び教職に就くが、画家への道を志して東京美術学校(現・東京藝術大学)へ進み、1912(明治45)年に卒業。大阪の浪華小学校に勤務し、その後松山の愛媛県師範学校に勤めながら画業にも励む。松山では、高浜虚子ら文人と交流し、南画風の作品も残している。1916(大正5)年、第10回文展に初入選する。1921(大正10)年に台湾に渡り、台湾美術展の創設に尽力、審査員を務めるなど台湾美術界の振興に努めた。1927(昭和2)年に創設された台湾美術展覧会(台展)では第1回展から運営と審査に携わり、日本画壇から藤島武二や梅原龍三郎らを審査員として招くなど、台湾の美術振興に情熱を注いだ。1931(昭和6)年には日本の独立美術協会の台北巡回展を開催。この展覧会は、台日新報で「大いに在台的画家たちを刺激し(中略)眠れる画壇を刺激した」と評されるなど、革新的展覧会として受け入れられる。その結果、台湾では新興洋画会、台野美術協会、台湾美術連盟などの在野の美術団体が次々と設立されることとなった。1946(昭和21)年、宮崎に引き揚げ、宮崎大学講師や県展(現・みやざき総合美術展)の審査員を務めるなど本県の美術界に大きく貢献した。1952(昭和27)年、宮崎県文化賞を受賞。1954(昭和29)年没。

Director's comment

2018年の初め頃に宮崎県内の骨董店で台湾原住民タイヤル族の少女が描かれた古い油絵を見つけました。塩月桃甫の絵でした。かつて日本の地図が1番広がった時代の、他民族の文化や風土、色、模様、生活に至るすべてに夢中になっている塩月の姿が目につきました。戦前の同化政策の中で多様性を表現する事は大変な時代だったと思います。その塩月桃甫の信念にドキュメンタリー映画の制作を決意しました。今日、台湾で見ることのできる塩月桃甫の作品の多くは戦前の白黒の資料写真、またはいくつかの台湾の美術館に小さめの作品が1〜2点ほど収蔵されているくらいです。宮崎ではまだ塩月桃甫作品が見つかる可能性があります。ぜひ探してみてくださいね。

Director's comment

本展監修者の小松孝英氏(美術家・映画監督)に、出展作家についてや、出展作家と塩月桃甫に関するエピソードなどを紹介していただきました。

藤島武二

ふじしま たけじ

1867(慶応3)年、鹿児島県鹿児島市に生まれる。四条派の画家平山東岳^{ひらやま とうがく}に就いて絵画を学ぶ。1884(明治17)年東京に出て、翌年川端玉章^{かわばたぎょくしょう}の門に入り、玉堂^{ぎょくどう}と号し日本美術協会に出品して受賞。1890(明治23)年、念願の洋画の研究に転じ、曾山幸彦^{そやま さちひこ}に師事した。1891(明治24)年、明治美術会会員となる。1892(明治26)年、三重県尋常中学校助教諭として赴任。1896(明治29)年、東京美術学校(現・東京藝術大学)に西洋画科が設置され、黒田清輝^{くろだ せいき}の推薦により助教授に任命される。この年白馬会の創立により会員となり、その後毎年同展覧会にて発表する。1905(明治38)年、文部省より絵画研究のため4年間のフランス、イタリア留学を命じられ、はじめはパリのグラン・ショミエールに入り、ついで国立美術学校に入学、フェルナン・コルモンに師事し、イタリアに移り、カロリュス・デュランの薫陶を受けた。1910(明治43)年、東京美術学校教授に任命される。1912(明治45)年、岡田三郎助^{おかだ さぶろうすけ}と本郷洋画研究所(のちの本郷絵画研究所)を設立する。1913(大正2)年、川端絵画研究所に洋画部が設置され、その指導に当たる。1937(昭和12)年、新しく制定された文化勲章を授与される。満州美術展覧会の審査員として渡満し、蒙古、熱河、北京等を巡遊。1938(昭和13)年、再び渡満し、軍の委嘱により上海、杭州、蘇州等を旅行し、戦跡を写す。1942(昭和17)年、第2回聖戦美術展覧会の審査委員長を委嘱される。1943(昭和18)年没。

Director's comment

藤島は塩月の東京美術学校時代の恩師です。塩月が第7回、第8回、第9回台湾美術展覧会の審査員に呼んでいます。昭和14年に塩月も招待出品した第一回聖戦美術展では、藤島は審査委員長を務めています。

梅原龍三郎

うめはら りゅうざぶろう

明治21(1888)年、京都府京都市下京区に染呉服業の子として生まれる。はじめ龍三郎、のち良三郎と改め、26歳のとき再び龍三郎を名乗る。1903(明治36)年、京都府立第二中学校を三年で中退し、伊藤快彦^{いとう やすひこ}の画塾「鐘美会」^{しょうびかい}で洋画の手ほどきを受け、1906(明治39)年創設の関西美術院を通じて安井曾太郎^{やすい そうたろう}らとともに浅井忠^{あさい ちゅう}の指導を受ける。1908(明治41)年渡欧し、パリのアカデミー・ジュリアンに通う。同年、ルノワールに勧められブルターニュに赴き、同地で斎藤豊作^{さいとう とよさく}、和田三造^{わだ さんぞう}と交友。秋からはアカデミー・ランソンに通った。1911(明治44)年ピカソを知りそのアトリエを訪問。1914(大正3)年二科会創立に会員として参加。1917(大正6)年二科会を退会。1920(大正9)年再渡欧。翌年帰国後鎌倉市に居住し、長与善郎^{ながよ よしろう}、岸田劉生^{きしだ りゅうせい}との親交をはじめ。1922(大正11)年春陽会創立に会員として参加したが、1925(大正14)年脱会。翌年川島理一郎^{かわしま りいちろう}らと国画創作協会に入り第2部(洋画部門)を創設し、さらに1928(昭和3)年国画会を結成し主宰する。1944(昭和19)年には東京美術学校(現・東京藝術大学)教授に就任。この間、1933(昭和8)年から台湾、鹿児島、1939(昭和14)年に北京をはじめて訪れる。戦後は、1946(昭和21)年の第1回日展審査員を務めたが、翌年から国画会の日展不参加を表明。1952(昭和27)年安井とともに東京美術学校を退官、同年共に文化勲章を受章する。同年、第26回ヴェネツィア・ビエンナーレ展の国際審査員を務めた。1952(昭和27)年以来、しばしば渡欧。1986(昭和61)年没。

Director's comment

梅原は第9回、第10回の台湾美術展覧会の審査員として塩月に呼ばれています。その次の年の1937(昭和12)年に開催されるはずだった第11回台湾美術展覧会は、日中戦争のために中止となりました。

石川 欽一郎

いしかわ きんいちろう

1871(明治4)年、静岡県静岡市で生まれる。東京に移って通信省東京電信学校に学び、ここで洋画家小代為重しょうだいためしげの教えを受ける。大蔵省印刷局勤務の傍ら、独学で水彩画を学び、明治美術会に出品。研究会「自来集」じらいしゅうに参加、浅井忠あさい ちゅうの指導を受ける。また明治美術会解散後は、洋画団体「巴会」ともえかい結成に参加。1900(明治33)年に陸軍参謀本部の通訳官として義和団事件に従軍して負傷。日露戦争より戻った後『みずゑ』に百十余編の文章を寄稿、外国文献からの翻訳で英国水彩画の紹介に努めた。1907(明治40)年の第1回文展をはじめとして幾度か文展にもその名を記し、1913(大正2)年日本水彩画会の創立に参加。また光風会にも出品し、晩年は日本水彩画会のリーダーとして世に知られた。1907(明治40)年～1916(大正5)年と、1924(大正13)年～1932(昭和7)年の2期に渡って台湾で美術教育に携わり、同地の近代洋画の祖としても仰がれている。1945(昭和20)年没。

Director's comment

塩月桃甫と石川欽一郎の2人は台湾の高校教科書に掲載されていて、台湾に近代美術の種を蒔いた代表的な2人として記録に残っています。実は塩月よりもこの石川欽一郎の方が現地台湾では広く知られていて、彼の知名度が塩月に注目する糸口となり、後にドキュメンタリー映画の制作へと繋がりました。

小澤秋成

おざわ あきなり

1886(明治19)年、長野県上伊那郡(現・駒ヶ根市)に生まれる。旧姓は堀。「しゅうせい」とも名乗った。1911(明治44)年、東京美術学校図画師範科(現・東京藝術大学)を卒業。中学校の教員を経て、1927(昭和2)年に渡仏し、サロン・ドートンヌ、ル・サロンなどの展覧会に出品。また、当時パリで菅原精造らが広めていた漆工芸に興味を持つ。1930(昭和5)年、帰国。翌年、東京の三越で「小澤秋成滞欧洋画展覧会」を開催。1931(昭和6)年に台湾美術展の審査員として台湾に渡り、1934(昭和9)年に帰国。1935(昭和10)年に東京に出て「漆工芸社」を設立。新技法を発見したり、聚成という名のオリジナル図案を考案し、注目を集めた。戦時中は長野に帰郷した。1954(昭和29)年没。

Director's comment

小澤秋成は塩月桃甫と同じ年に生まれ同じ年に亡くなった画家です。2人は東京美術学校時代に出会い親しくなったと思われます。塩月が第5回、第6回、第7回台湾美術展覧会の審査員に小澤を呼んでいて、台湾を描いた作品を多数残しています。

木下 静涯

きのした せいがい

1887(明治20)年、長野県上伊那郡(現・駒ヶ根市)に生まれる。名は源重郎。12歳頃から田中亭山について絵の手ほどきを受ける。1901(明治34)年、中沢尋常高等小学校を卒業後、中沢上割分教場で代用教員を務め、そのかたわら木下琴斎に俳諧を学んだ。1903(明治36)年、上京して中倉玉翠の門に入り、ついで四条派の村瀬玉田に師事した。同年12月、入隊したが胸膜炎のため翌年2月に除隊。この年の秋、京都の竹内栖鳳に入門したが、1年後再び東京に戻った。1918(大正7)年、台湾に渡り、1945(昭和20)年の終戦まで同地で日本画家として活動した。総督府郵便30年記念葉書制作や、台湾神社、建功神社への奉額のほか、総督府、台中神社、州庁、大学、全島の学校の講堂から作品委嘱を受けた。1946(昭和21)年の帰国後は故郷の長野に戻り、1949(昭和24)年、北九州市小倉に移住。1988(昭和63)年没。

Director's comment

塩月桃甫と石川欽一郎とともに台湾美術展覧会を創設した4人のうちの1人で、台湾の美術史や美術館に作品が多数残っている日本画家です。戦前に木下静涯が過ごした台湾の淡水のアトリエは現在、記念館になっています。素敵な場所ですので是非行かれてみてはいかがでしょうか。

山田新一

やまだ しんいち

1899(明治32)年に、台湾の台北市に生まれる。父の任地である甲府、東京、青森、北海道小樽、栃木で幼少年期を過ごし、1917(大正6)年、都城中学校を卒業。同年川端画学校に入る。1918(大正7)年東京美術学校西洋画科(現・東京藝術大学)に入学。藤島武二ふじしま たけじに師事し、佐伯祐三さえき ゆうぞうと交遊する。1937(大正12)年東京美術学校を卒業して同校研究科へ入学。同年より京城けいじょう(現・韓国ソウル)に居住。1945(昭和20)年の第二次世界大戦終戦まで同地に住んだ。この間、朝鮮総督府京城第二高等普通学校常勤講師を務め、1928(昭和3)年より1939(昭和5)年までフランスに滞在し、アカデミー・グラン・ショームエールでアマン・ジャンに師事。滞仏中はサロン・ドートンヌに出品した。戦後は京都に住み、日展に出品を続けるとともに、1948(昭和23)年より光風会展にも出品し、同年同会会員に推された。一方、京都工芸繊維大学、京都女子大学、関西日仏学館で教授を務めるとともに、1952(昭和27)年開設のヤマダ洋画研究所で後進を指導した。1991(平成3)年没。

Director's comment

塩月桃甫と山田新一の作品が一緒に並んだのは、戦後なかむら ちへい中村地平が館長時代の宮崎県立図書館だと思っていましたが、戦前の聖戦美術展覧会で並んでいたようです。塩月は台湾美術展覧会で、山田は朝鮮美術展覧会で活躍していました。山田新一もいずれドキュメンタリー映画化する予定です。

中澤弘光

なかざわ ひろみつ

1874（明治7）年、東京都・芝で日向佐土原藩藩士の子として生まれる。若くして曾山^{そやま}幸彦^{さちひこ}に師事し、のち堀江正章^{ほりえ まさあき}、黒田清輝^{くろだ せいき}に学んだ。はじめ明治美術会に出品したが、1896（明治29）年黒田らの白馬会結成に参加。また同年東京美術学校西洋学科選科（現・東京藝術大学）に入学し1900（明治33）年卒業した。1907（明治40）年第1回文展以来、始終帝展に発表し、初期文展では度々受賞、1910（明治43）年から審査員となった。1919（大正8）年からは帝展の審査員をつづけ、1930（昭和5）年帝国美術院会員、1937（昭和12）年帝国芸術院会員、1944（昭和19）年皇室技芸員となった。1938（昭和13）年に台湾総督府美術展覧会（府展）の審査員に就任し、翌年に多くの展覧会で台湾を題材とした作品を発表した。戦後も日展に出品、1957（昭和32）年文化功労者となり、日展顧問であった。そのほか、光風会、白日会、日本水彩画会等のリーダーとして活躍した。1964（昭和39）年没。

Director's comment

昭和12年に日中戦争が始まった事により台湾美術展覧会が中止され、昭和13年に台湾総督府主催になり第1回台湾総督府美術展覧会（府展）となった年に塩月に審査員と呼ばれています。塩月との交流は調査中です。

興梠富士夫

こおろぎ ふじお

1930(昭和5)年、高千穂町に生まれる。1953(昭和28)年、宮崎大学学芸部美術科を卒業。長年絵筆をとらない時期があったが、50歳で制作を再開。1976(昭和51)年、日展に初入選。1990(平成22)年、宮崎県美術展特選。1991(平成3)年、光風会奨励賞など受賞多数。1999(平成11)年、光風会会員推挙。2002(平成14)年の宮日総合美術展特選により無鑑査となる。同年日展会友推挙。幼少期の原風景である海や砂をモチーフとして描き続けている。塩月が1952(昭和27)年に宮崎大学で認定講習会の講師を務めた際に、受講生の一人として出会っている。

Director's comment

塩月の晩年、宮崎大学での教え子です。映画の撮影にご協力いただいたときには、塩月が授業で使っていたメモ帳を学生たちが休み時間にのぞき見したり、夏の暑い日に塩月を家まで送った時に氷水をいただいた思い出などを、記憶をなぞるようにお話してくださいました。

坂本正直

さかもと まさなお

1914(大正3)年、宮崎郡生目村(現・宮崎市)に生まれる。1934(昭和9)年、旧制宮崎中学校卒業。1935(昭和10)年、兵役を終え、独立美術協会京都研究所に入り、須田国太郎すだ くに たろうの指導を受ける。1937(昭和12)年～1940(昭和15)年、召集を受け中国へ。1940(昭和15)年、復員後に再び京都の研究所へ入り、独立展に出品する。1942(昭和17)年～1945(昭和20)年、2度目の召集で台湾へ。台湾美術展で塩月桃甫を知る。1947(昭和22)年、復員後、県内中学校で美術教師を務める。1951(昭和26)年、瑛九えいきゅうの紹介を得て、かねてより傾倒していた山口薫やまぐち かおるに師事する。1953(昭和28)年、洋画では初の宮崎県美術展(現・みやざき総合美術展)無鑑査。1955(昭和30)年、武蔵野美術大学卒業。独立美術協会を脱会し、モダンアート協会展に出品。1961(昭和36)年、独立美術協会会友を経て、モダンアート協会会員。1963(昭和38)年、第1回九州山口油絵コンクールでグランプリ受賞(九州山口朝日賞)。1967(昭和42)年、宮崎県文化賞。1973(昭和48)年、国富町八代中学校を最後に退職。2011(平成23)年没。

Director's comment

坂本正直は昭和17年に2度目の召集で台湾へ行き塩月桃甫と出会いました。同郷の絵を描く坂本の事を知った塩月は、坂本が滞在する兵舎に絵の具を持って行ったそうです。戦時中でも坂本に絵を描いてほしかった塩月の気持ちがわかります。戦後も塩月桃甫なかもと ちへいや中村地平と親交がありました。

サイタ亨

さいた とおる

1903(明治36)年、熊本県天草に生まれる。本名は歳田亨^{さいた とおる}。1931(昭和6)年、九州大学医学部を卒業。同大学在学中から水彩画を描いており、在学中に福岡美術展に出品。1933(昭和8)年から1940(昭和15)年まで医師として台湾に渡り、塩月桃甫を知る。台湾美術展、台湾美術連盟展、日本水彩展等に出品。1948(昭和23)年、独立美術協会会友となる。翌年、宮崎に引き揚げていた塩月を慕って宮崎県西都市で開業する。1950(昭和25)年、宮崎在住の短い期間に川越彌録^{かわごえ みろく}、黒木亮らと宮崎県水彩画会を創立し、杉山昭ら後進の指導にも当たった。1952(昭和27)年には東京に転居し、新しき村展に出品。1954(昭和29)年水彩連盟準会員となり、1956(昭和31)年、会員となる。以後医業のかたわら国内外の美術展で活躍を続け、1960(昭和35)年に独立美術協会を退会。1961(昭和36)年第13回読売アンデパンダン展に出品、以後2回出品。1964(昭和39)年、第6回現代日本美術展に出品、コンクール候補賞を受賞。1965(昭和40)年日本国際美術展に招待出品。1974(昭和47)年第17回新象作家協会展に出品、会員となる。1977(昭和52)年には水彩連盟展で小堀進賞を受賞する。1987(昭和62)年没。同年水彩連盟展にサイタ亨賞が設けられた。1986(昭和61)年没。

Director's comment

九州大学医学部卒の医師で水彩画家。戦前に医師として台湾の高雄に渡り、台湾美術展覧会に出品していました。塩月桃甫に出会い師事。戦後に塩月を慕って宮崎県西都市で開業しましたが、昭和27年には東京に転居しました。謎の多い水彩画家です。

瑛九

えいきゅう

1911(明治44)年、宮崎市に生まれる。本名は杉田秀夫。1925(大正14)年に上京し日本美術学校洋画科に入学。1927(昭和2)年に美術評論を始め、学校を1年で中退する。1927(昭和2)年～1928(昭和3)年、美術雑誌『アトリエ』『みずゑ』等に美術批評を寄稿。1930(昭和5)年からフォト・デッサン(感光紙と光源の間に物体を置いて、カメラを用いず露光させる技法)を試みる。1930(昭和7)年～1933(昭和8)年に写真雑誌『フォトタイムス』に写真および写真批評を発表。1934(昭和9)年～1935(昭和10)年、油絵の制作に専念する。1936(昭和11)年、瑛九の作家名で作品を発表し、同年グループ「新時代」に参加。翌年、日本美術家協会設立に参加。戦後にかけて油絵とフォト・デッサンの作品を発表。1950年代からエッチング、続いてリトグラフの制作を開始する。1951(昭和26)年、協会を退会し、デモクラート美術協会を結成。同年、「瑛九後援会」がつくられ、パンフレット「芸術家瑛九」が出版。埼玉県浦和市に住む。1952(昭和27)年、デモクラート美術家協会第1回展に出品。1952(昭和27)年にフォト・デッサン、1957(昭和32)年にリトグラフ、1960(昭和35)年に油絵の個展を開催。1957(昭和32)年には第1回東京国際版画ビエンナーレ展に出品。1960(昭和35)年没。

Director's comment

戦後、塩月桃甫の最後のアトリエ(宮崎市)と瑛九の住まいが近所だった事から交流がありました。塩月が亡くなる前の年に、台北第一中学校と台北高等学校の卒業生と教授を中心に塩月桃甫後援会ができました。瑛九はその顧問になっています。

西尾善積

にしお よしづみ

1912(明治45)年、京都府京都市に生まれる。幼少期に台湾に移住し、父は台北で写真機材を販売する商店を営む。台北第一中等学校に通い、塩月桃甫に師事する。1939(昭和14)年に東京美術学校油画科(現・東京藝術大学)を卒業、在学中の1938(昭和13)年の第2回新文展に初入選。藤島武二、川島理一郎ふじしま たけじ かわしま りいちろうに師事。1943(昭和18)年の第30回光風会展に入選、光風賞を受賞。戦後も、同会の会員として審査員、評議員などを務め、1970(昭和45)年に退会。一方、1947(昭和22)年の第2回日展に入選、特選となり、以後1951(昭和26)年の第7回展から1957(昭和32)年の第13回展まで、日展に出品委嘱。1958(昭和33)年から1960(昭和35)年まで、フランスに留学。帰国後は、日展において審査員、評議員を務め、1993(平成5)年に参与となった。1989(平成元)年の第21回展に出品、そして翌年の第22回展への出品が同展への最後の出品となった。1995(平成7)年没。

Director's comment

塩月桃甫の台北第一中学校の教え子。塩月が台北京町で開いていた夜間画塾にも通っていました。昭和13年から第1回、第2回、第3回台湾総督府美術展覧会で特選。塩月の教え子の中で画家として1番出世したのがこの西尾善積です。後に日展の審査員、評議員、日展参与にまでなりました。

杉山昭

すぎやま あきら

1927(昭和2)年、西都市に生まれる。水彩画家のサイタ亨^{とある}に影響を受ける。1961(昭和36)年、水彩連盟会員となる。1962(昭和37)年、宮日総合美術展の無鑑査となる。1989(平成元)年、第23回モンテカルロ現代美術国際賞展に出品し、フランスの美術誌に紹介される。1992(平成4)年からモダンアート展に出品する。コラージュなどを用いて独自の水彩画を描く。戦後に塩月の指導を受けており、水彩画の描写における色彩表現やデフォルメについての影響を受けた。

Director's comment

サイタ亨に師事した杉山は、62歳のときに「九州7730 幻の画家 ～塩月桃甫の生涯～」(平成元年、NHK宮崎放送)に出演し、塩月作品の解説を務めています。番組では、元の形が無くなるまで単純化された塩月の描き方に驚いたと発言しています。

石井秀隣

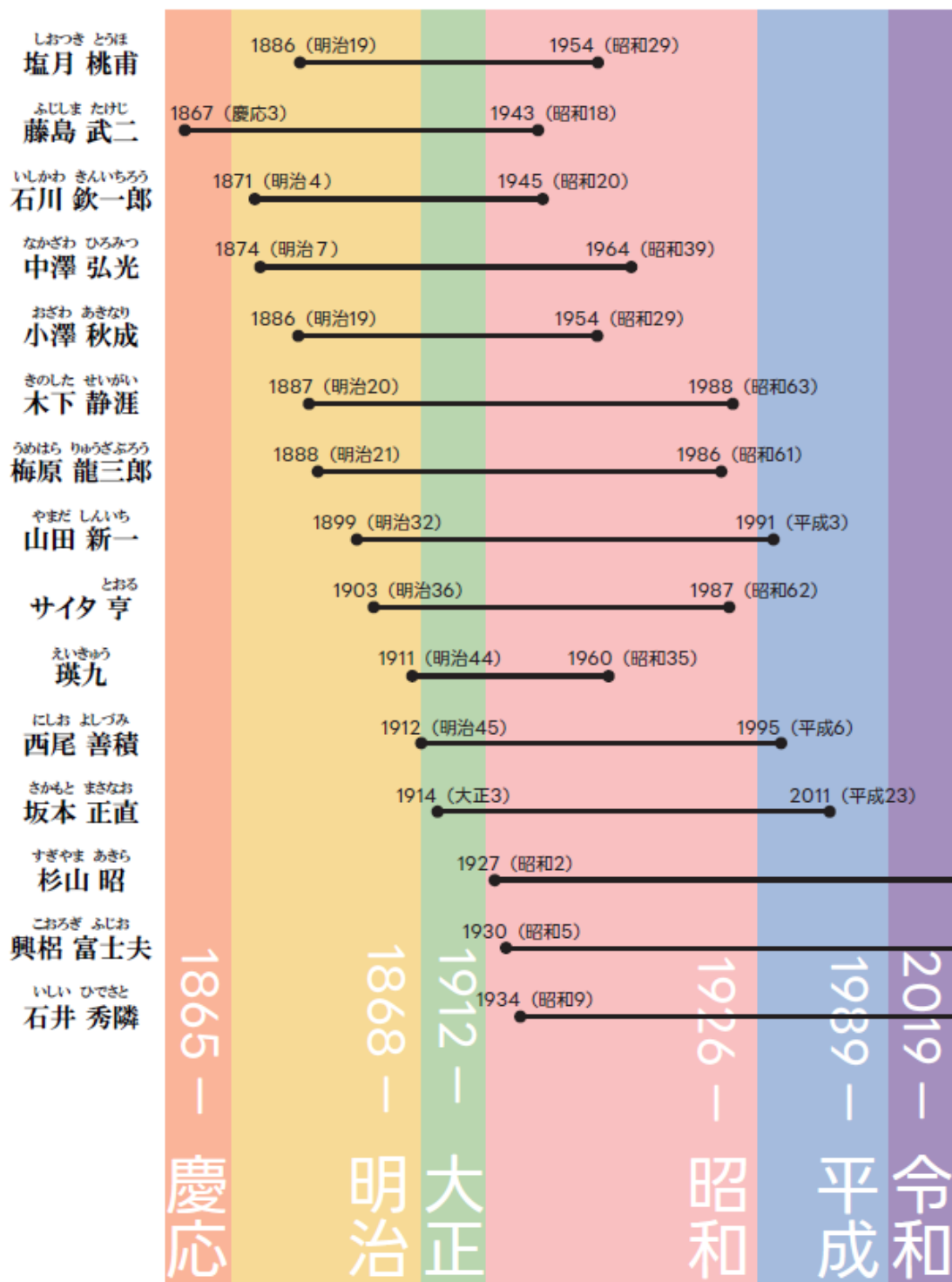
いしい ひでさと

1934(昭和9)年、高鍋町に生まれる。福岡学芸大学(現・福岡教育大学)美術科を卒業。宮崎県内の県立高校で美術教諭として勤務する。2002(平成14)年から2005(平成17)年まで高鍋町美術館館長に就任。宮崎県美術連盟会長、高鍋町美術協会会長、高鍋町文化協会会長を務め、県内の美術教育に寄与する。2007(平成19)年には宮崎県文化賞を受賞。塩月が1946(昭和21)年に児湯郡高鍋中学校の嘱託を勤めた時期に、学生の一人として出会っている。

Director's comment

戦後に中村地平^{なかむら ちへい}の紹介によって、塩月が高鍋中学校で教えた時期の教え子です。当時は宮崎市から高鍋まで電車で通うのは大変時間がかかり、貧乏でも絵を描く時間がほしいと塩月は3ヶ月ほどで辞めてしまいました。塩月とパーミليون(赤色)の思い出などをお持ちで、他にも塩月が赴任した日の面白いエピソードなどご存知ですので是非直接聞かれてみてはいかがでしょうか。

関連作家 生没年表



展示風景

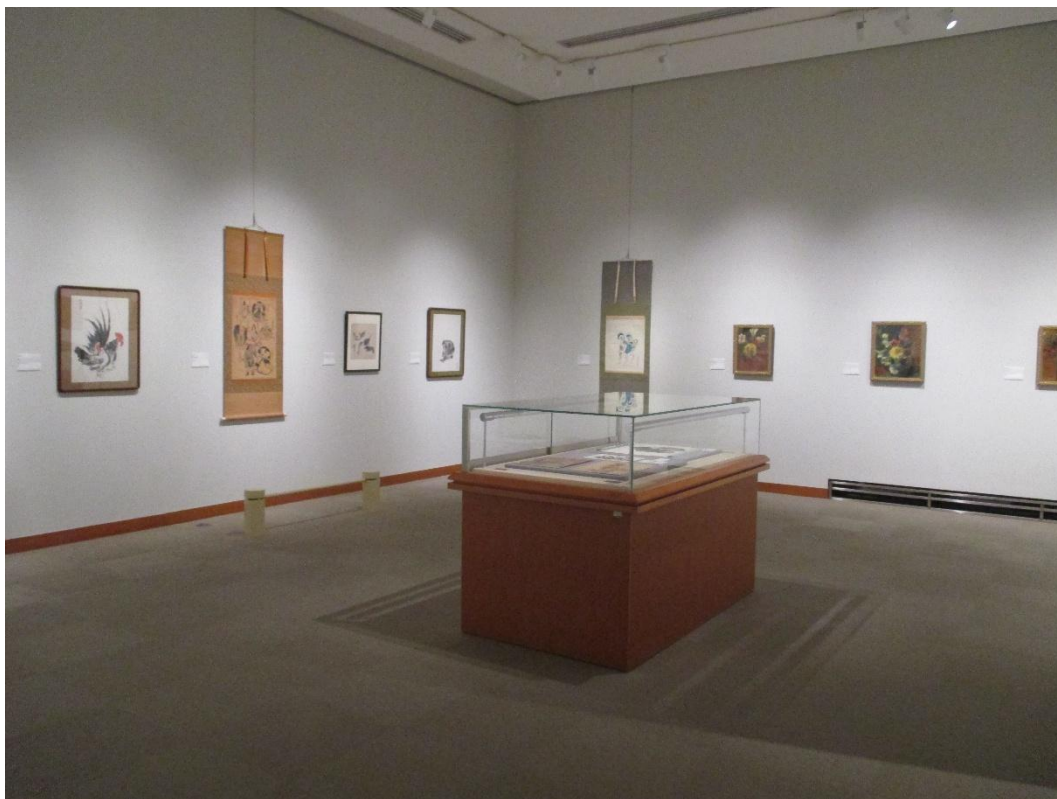


入口



第1展示室

展示風景



第1展示室



第1展示室

展示風景

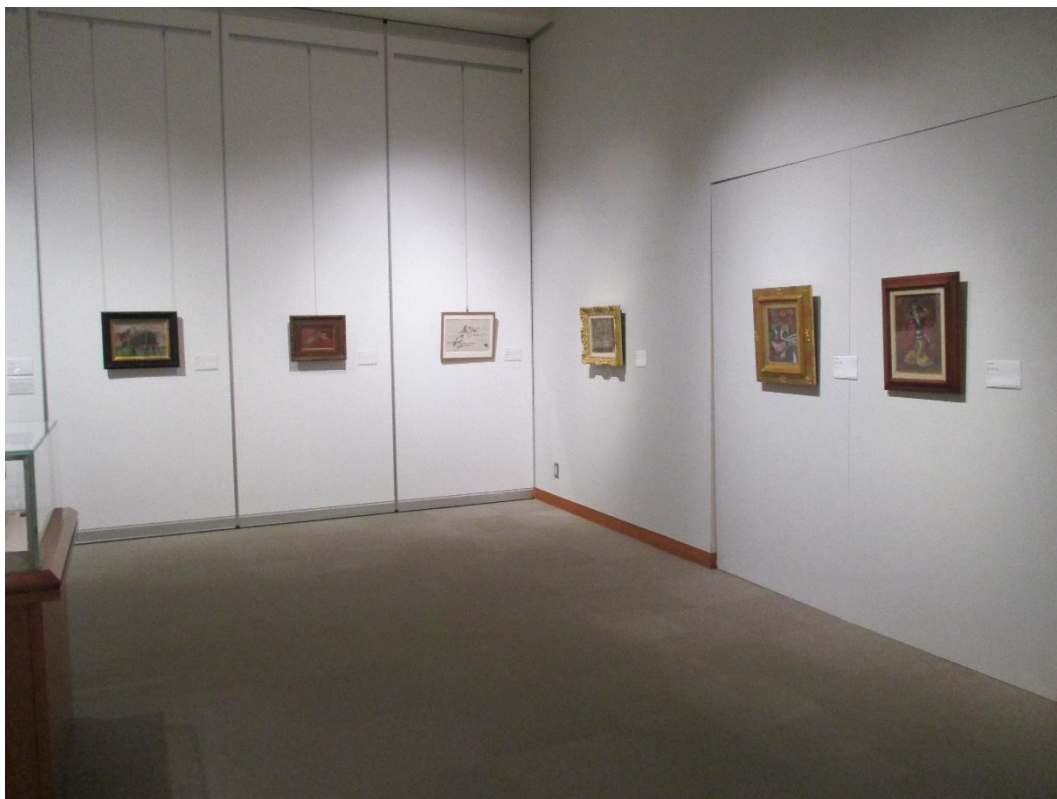


第1展示室

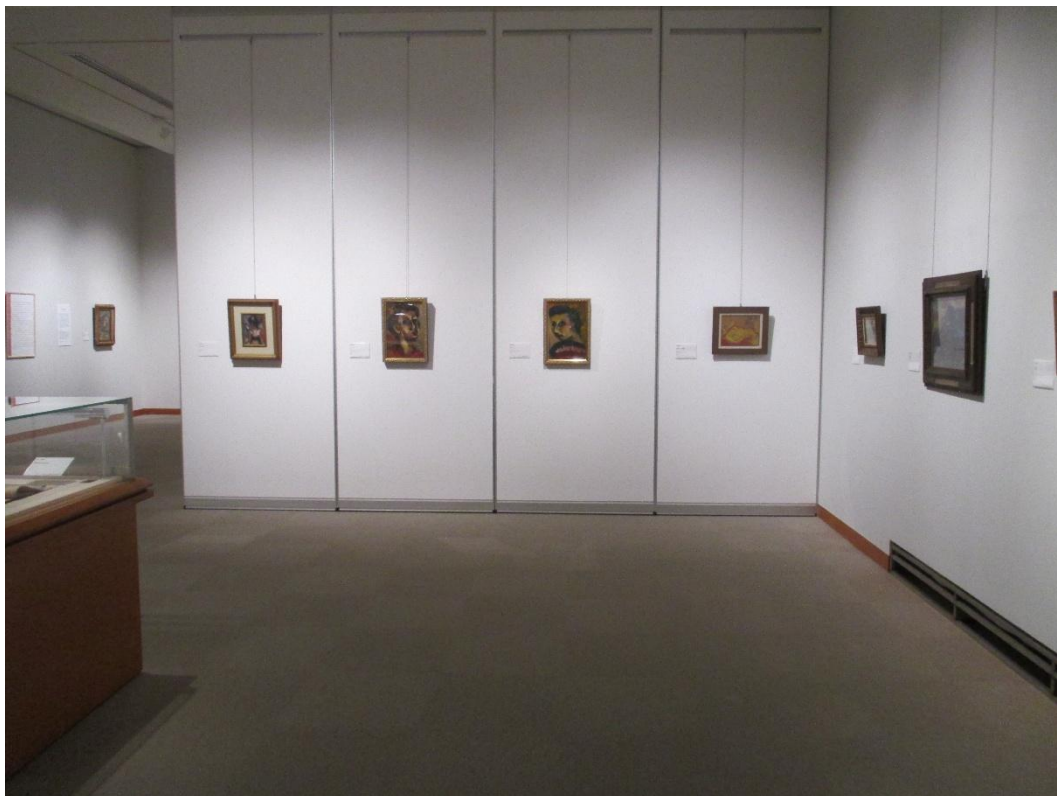


第2展示室

展示風景



第 2 展示室



第 2 展示室

展示風景

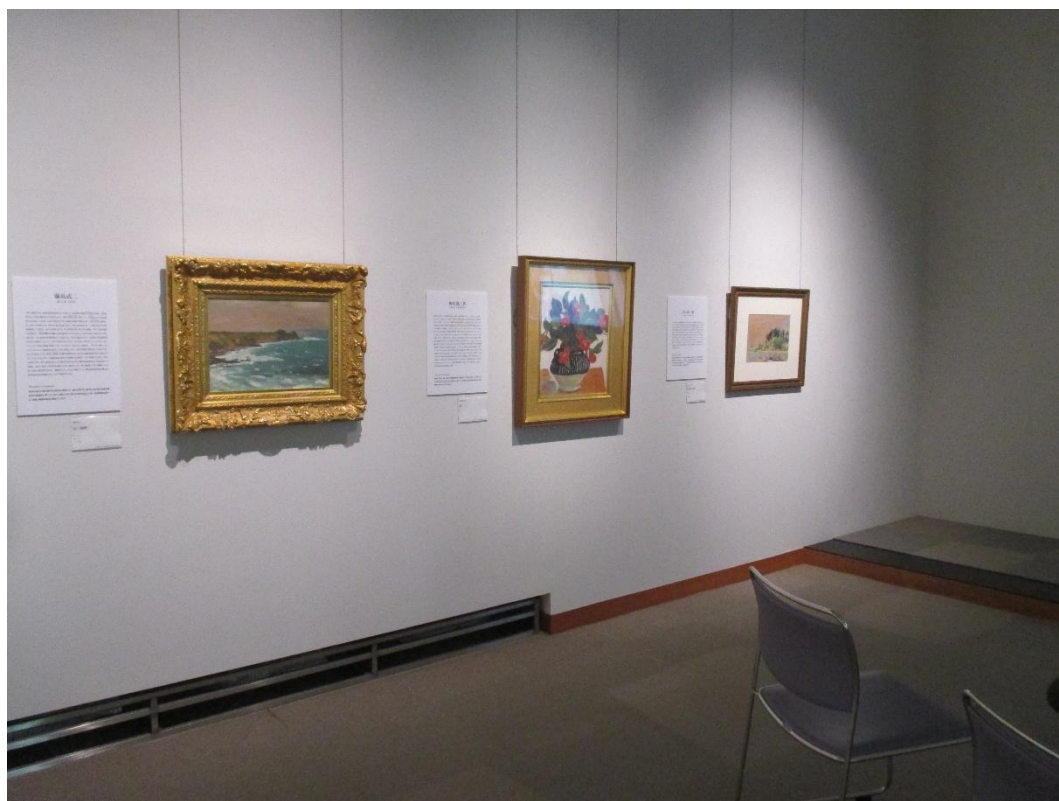


第2展示室



第2展示室

展示風景



第3展示室



第3展示室

展示風景



第3 展示室



第3 展示室

展示風景



回廊

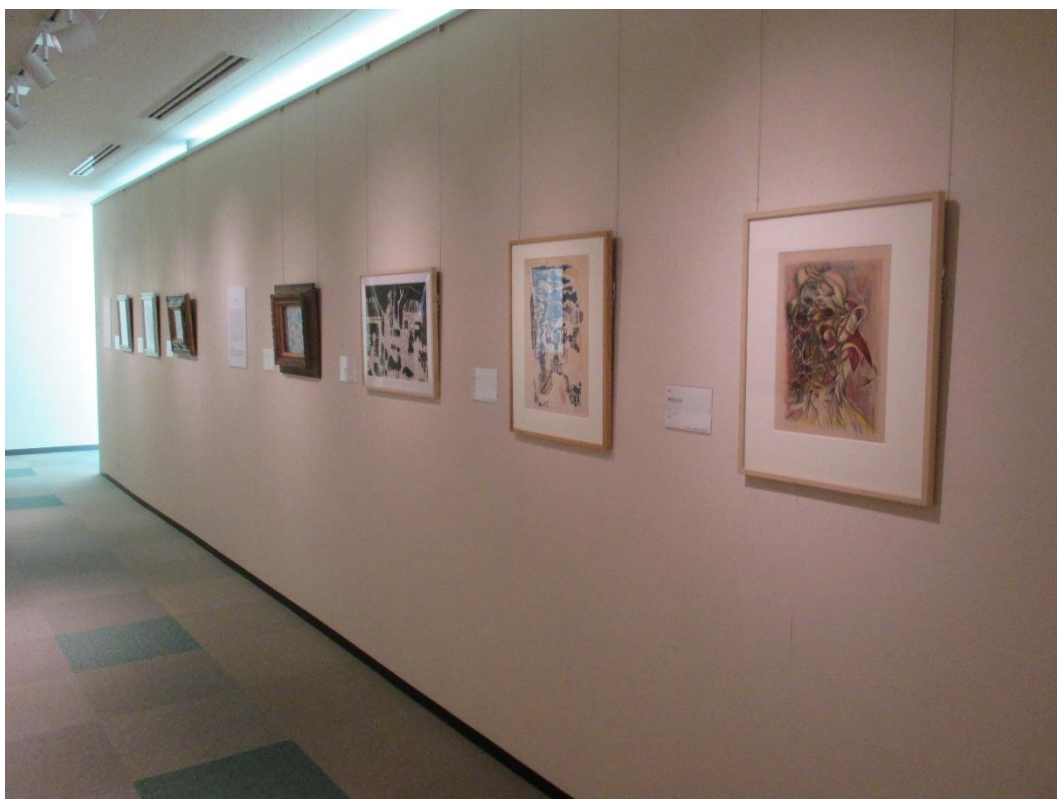


回廊

展示風景



回廊

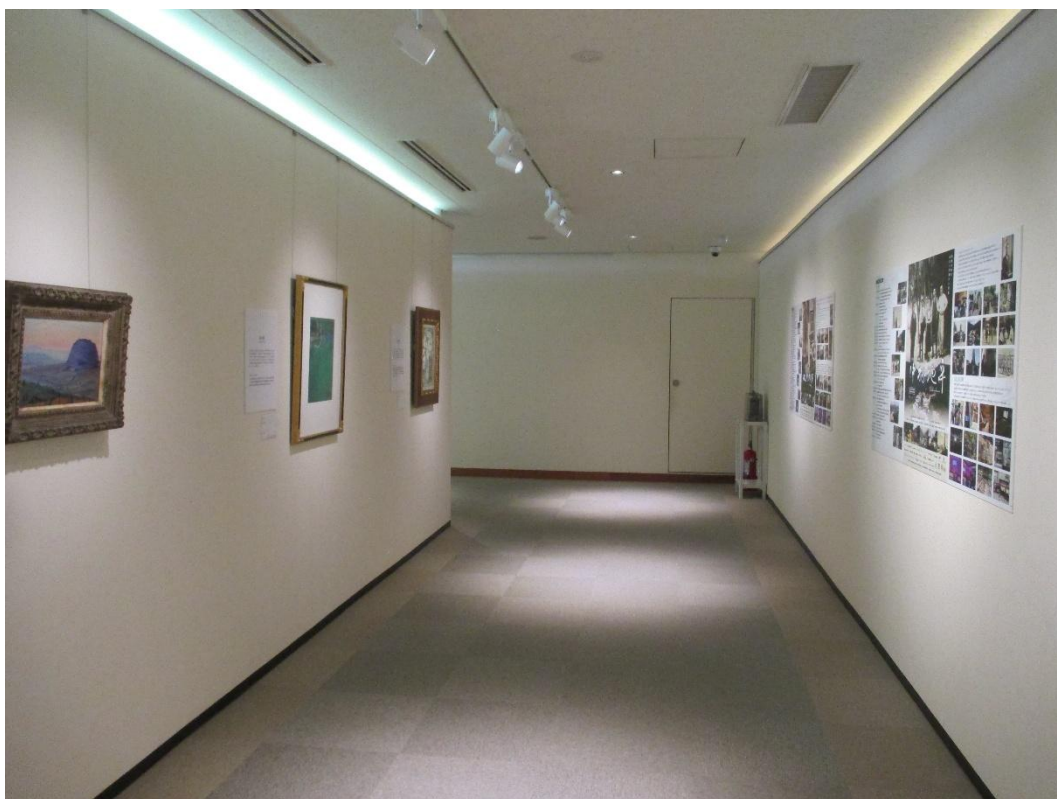


回廊

展示風景



回廊



回廊

展示風景



回廊



回廊



回廊

生誕140年

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART

塩月桃甫とその周辺作家たち

2026年6月6日(土)～7月5日(日)

主 催 | 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町
監 修 | 小松孝英
特別協力 | 塩月光夫・みぞえ画廊・日州ドキュメンタリー
後 援 | 宮崎日日新聞社・MRT宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

*本展で展示する多くの塩月作品は制作年が不詳の為、
①初期(～1920年頃) ②中期/台湾時代(1921～1945年頃) ③後期/宮崎時代(1945～1954年頃)に振り分けて明記しています。

No.	作品名	作者名	技法・材質等	制作年	所蔵
第1章 画家、教育者としての塩月桃甫					
1	油津	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1928年	みぞえ画廊
2	パイワン	塩月桃甫	紙本墨画	1921～1945年頃	個人蔵
3	台湾原住民少女	塩月桃甫	紙本淡彩	1921～1945年頃	個人蔵
4	鶏	塩月桃甫	紙本淡彩	1945～1954年頃	個人蔵
5	七福神の図	塩月桃甫	紙本淡彩	1945～1954年頃	個人蔵
6	タイトル不明	塩月桃甫	紙本淡彩	不明	個人蔵(旧蔵:中村地平)
7	猿	塩月桃甫	紙本淡彩	1945～1954年頃	個人蔵
8	タイヤルの二人	塩月桃甫	紙本淡彩	1945～1954年頃	個人蔵
9	黄いろい花	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
10	花	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
11	赤い花	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
12	無題	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
13	りんごのある静物	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
14	栗のある静物	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
15	風景(スケッチブックより)	塩月桃甫	パステル、紙	1921～1945年頃	個人蔵
16	風景(西都)	塩月桃甫	パステル、紙	1921～1945年頃	個人蔵
17	パイワン	塩月桃甫	紙本淡彩	1921～1945年頃	個人蔵
18	猫	塩月桃甫	紙本淡彩	1945～1954年頃	個人蔵

作品リスト

作品・資料名	作家名等	技法・材質等	制作年	所蔵先
19 いちぢく	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
20 佐土原人形	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
21 張り子の虎	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
22 白い馬	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
23 雀(下図)	塩月桃甫	紙本墨画	1945～1954年頃	個人蔵
24 雀	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
25 馬	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
26 安井息軒	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	宮崎市安井息軒記念館
27 翠榕No.5	中村地平/ 台北高等学専科学芸部	装丁書籍	1930年	個人蔵
28 太陽の眼	中村地平/西部図書	装丁書籍	1948年	個人蔵
29 帰一心命	田淵武吉/原生林社	装丁書籍	1943年	個人蔵
30 河童の遠征	中村地平/菊書房	装丁書籍	1947年	個人蔵
31 鳥來情調	瀬野尾寧/ 加藤豊吉(小塚本店印刷工場)	装丁書籍	1931年	個人蔵
32 日向文庫完成記念写真		資料	1953年	宮崎県立図書館
33 上杉鷹山	安田尚義/ 日向文庫刊行会	装丁書籍	1952年(1982年復刻)	個人蔵
34 皇国の道	二荒芳徳/実業之日本社	装丁書籍	1942年	個人蔵
35 生蕃伝説集	佐山融吉、大西吉寿/ 杉田重蔵書店	装丁書籍	1923年	個人蔵
36 伊予の湯	高浜虚子/森知之発行	装丁書籍	1919年	個人蔵
37 改訂 児童文学論	坪田譲治/西部図書	装丁書籍	1947 年	個人蔵
38 聖戦美術展集	朝日新聞社	資料	1939年	個人蔵
39 よそおい	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
40 女(2)	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
41 女(1)	塩月桃甫	油彩、カンヴァス	1945～1954年頃	個人蔵
42 横たわる裸婦	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
43 海	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵

作品リスト

作品・資料名	作家名等	技法・材質等	制作年	所蔵
44 霧島	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
45 青島	塩月桃甫	油彩、板	1945～1954年頃	個人蔵
46 皇太子殿下台湾行啓記念絵葉書		資料	1923年	個人蔵
47 台湾総督府始政第四十回記念絵葉書		資料	1935年	個人蔵
第2章 塩月桃甫の周辺作家たち				
48 波(潮岬)	藤島武二	油彩、カンヴァス	1931年頃	みぞえ画廊
49 椿	梅原龍三郎	油彩、紙	1944年	みぞえ画廊
50 武蔵野の新緑	石川欽一郎	水彩、紙	不明	みぞえ画廊
51 ドキュメンタリー映画「塩月桃甫」(80分)	日州ドキュメンタリー	映像	2021年	ー
52 高雄風景	小澤秋成	油彩、カンヴァス	1933年	みぞえ画廊
53 清雪宿禽之図	木下静涯	紙本淡彩	1950年	個人蔵
54 裸婦	山田新一	油彩、カンヴァス	1950年	個人蔵
55 機関士	山田新一	油彩、カンヴァス	1944年	個人蔵
56 婦人像	中澤弘光	油彩、カンヴァス	不明	高鍋町美術館
57 海邊	興梠富士夫	油彩、カンヴァス	2003年	高鍋町美術館
58 馬を輸送船にのせる	坂本正直	油彩、カンヴァス	1999年	個人蔵
59 芥子	サイタ亨	水彩、パステル、紙	1977年	個人蔵
60 アネモネ	サイタ亨	水彩、紙	1979年	個人蔵
61 椿	サイタ亨	油彩、カンヴァス	1927年	個人蔵
62 タイトル不明	瑛九	油彩、カンヴァス	1958年	個人蔵
63 田園	瑛九	ゼラチン・シルバー・プリント (フォトデッサン)	1951年	個人蔵
64 青いソナタ	瑛九	リトグラフ、紙	1956年	個人蔵
65 舞踏会の夜	瑛九	リトグラフ、紙	1957年	個人蔵
66 離れ山	西尾善穰	油彩、板	不明	個人蔵
67 緑の里	杉山昭	アクリル、パステル、紙	2004年	高鍋町美術館

作品リスト

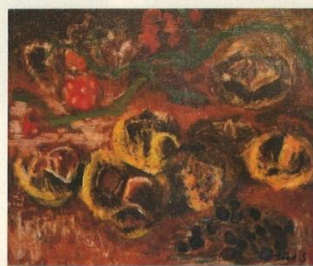
No.	作品名	作者名	技法・材質等	制作年	所蔵
68	カサブランカ	石井秀隣	油彩、カンヴァス	1997年	高鍋町美術館
第3章 塩月桃甫研究のいま					
69	台湾早期西洋美術回顧展	台湾市立美術館	資料	1990年	個人蔵
70	台湾美術運動史	藝術家出版社/謝里法	資料	1995年	個人蔵
71	南國・虹霓・鹽月桃甫	行政院文化建設委員會/王淑津	資料	2009年	個人蔵
72	世・紀・的・容・顔： 臺灣百年美術設計發展暨文獻展	創價文教基金會	資料	2023年	個人蔵
73	藝術家	藝術家出版社	資料	2025年	個人蔵

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART



生誕140年

塩月桃甫と その周辺作家たち



栗のある静物(1945～1954年頃) 塩月桃甫

2026年6月6日(土)～7月5日(日)

高鍋町美術館 (宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋6916番地1)

開館時間 | 10:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 | 月曜日(祝日は除く) 祝日の翌日(土日は除く)

観覧料 | 大人:300円(240円)

小中高生・高齢者・障がい者:150円(120円)

※常設展示室は改修工事中につき観覧できません。

()内は20名以上の団体料金またはJAF会員証をご提示の方。高齢者は70歳以上。

障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者1名まで。

未就学児と高鍋町在住または高鍋町内の学校に在籍する小中高生および特別支援学校生は無料。

監修 | 小松孝英 特別協力 | 塩月光夫・みぞえ画廊・日州ドキュメンタリー

主催 | 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後援 | 宮崎日日新聞社・MRT宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎



油津(1928年) 塩月桃甫

塩月桃甫がアジア近代美術史において果たした役割と、 画家として追求したものとはなんだったのか？

塩月桃甫(本名・永野善吉)は1886(明治19)年、西都市三財に生まれた画家です。
1912(明治45)年に東京美術学校図画師範科(現・東京藝術大学)を卒業し、9年間教職に就いたのち1921(大正10)年に台湾に渡り、台湾美術展の創設に尽力し、審査員を務めるなどして約25年間台湾美術界の発展に貢献しました。

宮崎に戻ってきてからも、学校美術展や宮崎県美術展覧会の審査員、宮崎大学や宮崎実践女子商業学校、日向女子自由学園、児湯郡教育会教科研究会の教授や講師を勤め、書籍、新聞、文芸誌、雑誌等の装丁もおこないました。

本展は、塩月の生誕140年となる記念のこの年に、現在個人が所有している塩月作品や関連の資料を中心に調査するとともに、塩月の交友関係と相互に与えた影響について整理するものです。



露社事件後に
母の絵を描く塩月桃甫
(昭和6年頃)



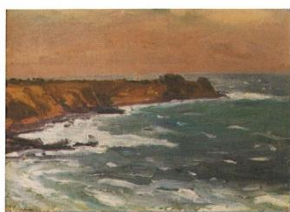
タイヤルの二人(1945年～1954年頃)
塩月桃甫



雀(1945年～1954年頃) 塩月桃甫



『生蕃伝説集』装丁(1919年) 塩月桃甫



波(潮岬)(1931年頃) 藤島武二



武蔵野の新緑(制作年不明) 石川欽一郎



高雄風景(1933年) 小澤秋成

展示構成

- 第1章 画家、教育者としての塩月桃甫
- 第2章 塩月桃甫の周辺作家たち
- 第3章 塩月桃甫研究のいま

出展作家

- 塩月桃甫／藤島武二／石川欽一郎／中澤弘光／小澤秋成／木下静涯
- 梅原龍三郎／山田新一／サイタ亨／瑛九／西尾善積
- 坂本正直／杉山昭／興相富士夫／石井秀隣

※都合により掲載作品を
展示しない場合があります



特別上映

ドキュメンタリー映画「塩月桃甫」

脚本・監督:小松孝英 製作:日州ドキュメンタリー

展覧会会期中、展示室内にて特別上映いたします。
(映画鑑賞には企画展観覧料が必要です)

高鍋町美術館 TAKANABE MUSEUM OF ART

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋6916番地1
TEL.0983-23-8887 FAX.0983-23-8890

交通案内

- ※三和交通バス「舞鶴公園前」下車徒歩3分、
または「荻崎」下車徒歩1分。
- ※JR九州「高鍋駅」から車で10分。
- ※宮崎空港から車で1時間。



生誕 140 年 塩月桃甫とその周辺作家たち

会 期 令和 8 年 6 月 6 日（土）～ 7 月 5 日（日）

開館時間 午前 10 時～午後 5 時（入館は午後 4 時 30 分まで）

休 館 日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）祝日の翌日（土日の場合は開館）

観 覧 料 大人 300 円（240 円）

小中高生・高齢者・障がい者 150 円（120 円）

※（ ）内は 20 名以上の団体料金または JAF 会員証をご提示の方。高齢者は 70 歳以上、障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者 1 名まで。未就学児と高鍋町在住または高鍋町内の学校に在籍する小中高生および特別支援学校生は無料。

会 場 高鍋町美術館

監 修 小松孝英

特別協力 塩月光夫・みぞえ画廊・日州ドキュメンタリー

主 催 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後 援 宮崎日日新聞社・MRT 宮崎放送・UMK テレビ宮崎・エフエム宮崎

作 品 数 73 点（資料、上映作品含む）

職員（令和 8 年度）

館 長 守部 有美子

総務学芸係

副 館 長 小森 隼

係長(兼)

小森 隼

マネージャー 島埜内 遵

学芸員(兼)

小森 隼

事 務 員

久家 多佳恵

事 務 員

富田 陽子

関連事業

6月28日（日） 午前・午後各1回高鍋町美術館多目的ホールにおいて、「ドキュメンタリー映画 中村地平」上映会を開催。塩月桃甫の教え子で作家の中村地平を紹介。監督の小松孝英氏の舞台あいさつ有り。

【作品情報】

「ドキュメンタリー映画 中村地平」（80分）

脚本・監督 小松孝英

制作 日州ドキュメンタリー映画制作実行委員会

公開年 2024年

令和 8 年 9 月印刷

令和 8 年 9 月発行

発行者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

印刷者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

Printed in Japan ©高鍋町美術館 2026 ©2026,Takanabe Museum Of Art
